
幸せになれるかもしれない世界で

あじゅ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せになれるかもしれない世界で

【Nコード】

N0123V

【作者名】

あじゆ

【あらすじ】

うずまき一家の幸せ探し。ある世界で、子には親がいなかった。ある世界で、親は生まれたばかりの子を失った。その二つが交わった時、もしかしたら幸せが見つかるかもしれない。不思議な形で巡り会った家族の運命は？ この話は妄想とねつ造の宝庫です。基本的にうずまき一家+カカシで話は進んでいきますが、進行状況によっては他のキャラも登場させる予定です。少年漫画的なバトルシーンやドキドキハラハラ展開はありません。

1（前書き）

はじめてみましたナルト二次連載。テーマは家族愛。付き合っていただけたら嬉しいです。

毎日毎日、苦しくて仕様がなかった。

毎日繰り返される暴力の意味を、子供は知らなかった。外を歩くたびに向けられる冷たい目も、小声で交わされる冷たい言葉たちも、なぜ自分に向けられるのか、わからなかった。

ただ一つ、その仕打ちの中でわかったことは、自分はこの里の人々に嫌われているということだけだ。

里人に殴られるとき、痛くて泣きわめくと、激しく怒鳴られ、さらにひどく殴られた。だから子供は、どんなに殴られても我慢しようとした。一生懸命我慢していれば、そのうち里人飽きてどこかに行ってしまう。泣きわめく時と比べると、ずっと早くに解放される。だから我慢することを覚えた。

幸い、と言っているのか、子供の体は丈夫だった。体中アザだらけになっても、次の日には綺麗に治っている。子供にとってそれは普通のことだったが、彼の事情を知る里人からはさらに気味悪がられた。なぜそう思われるのかも、子供には分からない。子供の周りには、その治りの速さが異常だと教えてくれる人はいなかったから。

だけど、どんなに治りが速くても、痛くて、痛くて、痛くて。身体だけじ

やなく、心臓の辺りがじくじくと痛くて。子供は、誰もいなくなつてからこつそりと泣いた。次の日になつたら身体は痛くなくても、心臓は痛いままだったからさらに泣いた。

もう苦しくて苦しくて、泣くことにも疲れてしまった。

その日も、子供は里人に殴られていた。

里の中の公園に一人で居たら、数人の里人に連れだされ、表通りからは見えない路地の隅に連れ込まれ、殴られた。

痛い、ヤメテと叫びたかったけれど、叫んだらもつとひどいことになるのは知っていた。だから黙って痛みに耐える。

たくさん我慢して、やっと解放された頃には日が暮れていた。

体中痛くて動けなかった。口の中が切れてしまったらしく、鉄の味が舌に広がって気持ち悪い。

動かない身体を何とか動かして、うつぶせの状態からごろりと反転させると、星空が目飛び込んでくる。黒と言うよりは紺色に近い夜空に、白い星が点々と輝いていた。

お星様は願いを叶えてくれる。三代目火影のジツチャンが、ずいぶん前に教えてくれたことを思い出した。それは正確には流れ星の

話だったが、子供の記憶力はあまりよくなかった。

（おほしさま、もしかなら・・・）

意識が朦朧としていく中、子供はぼんやりと“願った”。

（一回でいいから、父ちゃんと母ちゃんに、会わせてほしいってばよ）

そこでプツンと子供の意識は途切れ、雫のように流れた星に、彼が気付くことはなかった。

＊

はたけカカシは、血なまぐさい自分の臭気に耐えながら木々の間を走り進んでいた。音もなく気配を殺し、夜の闇に身をなじませるように素早く。動物を模した面と一般の忍とは明らかに違う形状の暗部の忍服には、赤い血がべつとりと張り付いていた。

今日の任務で返り血を浴びた。しくじった、としか言いようがない。血の強い臭気は追手を引き寄せる。自然と、任務終りの足は逃げるような足取りになった。今回の任務の標的は、その周りも含めすべて始末してきたが、それでも足は安心してくれない。

（忍たるもの平常心——だよな）

そう思いながらも、カカシが一息ついたのは木の葉の“あん”と書かれた門をくぐってからだった。自分の未熟さを感じずにはおれない。早く火影への報告を済まして、修業をしたかった。任務で体は疲れていたが、心は休息を求めている。こんな時はどうやっても寝付けないだろうから、どうせなら身体を動かそう。

そうやって今夜の予定の算段を組み立てつつ走っていると、夜の闇に似合わない金色が、視界の隅に入ってきた。一瞬気のせいかと思いつり過ぎたが、その明るい色がどうしても気になって引き返す。そして、路地の隅に太陽も見劣りするような鮮やかな金色が、気の所為でなくそこにいた。

「・・・子供？」

小さな金色の子供が倒れていた。なぜこんなところに、と浮かんだ疑問。首をかしげつつも子供の容体が気になって駆け寄り抱き上げると、カカシの両手に収まりそうなほど小さな子供の体は、ぐったりとしていた。その様子にぎょっとして子供の顔を覗きこむと赤黒く腫れあがっており、身体のうちこちも同様に腫れていた。骨が折れているのも見てとれる。

ひやりと、カカシの背中に冷たいものが流れる。

気付けば、カカシの足は病院に向かっていた。

急患として運び込まれた子供は、すぐさま集中治療室行きとなった。その中、ガラスの向こう側で処置されていくその姿は痛々しい。怪我は見慣れているつもりだったが、子供が傷つくことにはどうしても慣れることが出来ない。

「あの、すみません」

ガラス越しに金色の子供を睨み付けるように見つめていたら、看護師が遠慮がちに声を掛けてきた。彼女の視線が自分をうかがうような様子を見て、カカシは自分を見下ろして、「ああ」と納得する。

人を殺した暗部が、清潔な病院の中にいられるのは迷惑でしかないのだろう。自分の姿はそれくらいひどい。カカシにとっても、この血の臭気は不浄だ。

「火影様に報告を終えたら、また来ます。あの子のこと、よろしく願います」

軽く会釈してそう言っていると、看護師は明らかにホッとしたようで小さく笑った。一応彼女に暗部である自分がはたけカカシであることを告げて、集中治療室に背中を向ける。

正直、これ以上見ていられなかった。

病院から出て、火影邸へ向かうために走る。とりあえず今は、任務の報告のことだけ考えていよう。

火影邸に到着し、中の光が灯っていることを一応確認してから、火影室の扉を一度だけ叩いた。「入れ」と短い声が返ってくる。音もなく扉を開けて進み出て、積み重ねた書類を片付けている火影に声

を掛けた。

「四代目様」

眩しいほどの金色が、その声に揺れた。湖面のように静かな青い瞳がカカシを捉えると、僅かに細められて微笑の形を取る。

「ん！カカシくん。御苦労さま」

その色に、カカシは先ほどの子供を思い出した。

1（後書き）

正直ここに投稿していいのか悩みました。この先不適切な内容だと判断された場合は、ご一報ください。すぐさま削除いたします。

子供には両親がいなかった。自分がこうしているのだからその存在は確実にあるはずなのに、姿かたちどころか、父母の名前さえ、子供に教えてくれる人はいなかった。

他の子たちには当たり前にいる父と母という存在に、子供は焦がれた。親子三人で歩いている家族の子供が、羨ましくてたまらなかった。

そんなある日、子供が見つけたのが火影室に掲げられた写真の一枚。子供に唯一優しくしてくれた三代目のジツチャンは、「歴代の火影だ」と教えてくれた。中でも四代目の火影は、四年前不意に訪れた九尾の妖弧から、里人を命を張って守った英雄なのだと教えてくれた。

一番端に置かれた四代目の凛々しい顔は、子供の目から見ても美しかった。そして何より、目を引く金色の髪と青い目。それは奇しくも子供と同じ色だった。

その共通点に、子供は喜んだ。英雄と外見が少しでも似ているなんて！それは子供の数少ない自慢になった。

そしていつの間にか、子供は四代目火影のことを自分の父のように感じるようになっていた。心の中で、どうしても苦しいときに甘える偶像に四代目火影を当てはめた。誰にも話したことのないその秘密は、小さな子供の小さな心の支え。

母の面影はどうやっても思い浮かべられなかったから、“女の人

”という漠然としたイメージを膨らませた。心の中にだけいる、二人の大切な人たち。もし二人が現実はこの世界に居て、自分を抱き締めてくれたらどんなに幸せだろう。無条件にぬくもりをくれる存在を知らない子供は、その二人と幸せに暮らせる妄想を膨らませては自分の現実から目を逸らした。

そうじゃないと、立っていらなかったから。

黒く塗りつぶされていた視界をゆつくりと開ける。一番に空が見えると思っただのに、そこにあっただのは見慣れない天井だった。なぜ、と疑問に思うのもつかの間、体中にギシリと鈍い痛みが走る。あまりに痛くて、泣きそうになった。

「あ、起きたね。動いちゃダメだよー、怪我が悪くなる」

聞き慣れない声に目だけ動かすと、銀髪の男が笑っていた。顔のほとんどを口布と額当てで隠しており、唯一見えている右目が弧を描いている。

「今医者を呼んでくるから、待っててね」

そう言いながら男は立ち上がって、子供の頭を優しく一度だけ撫でると部屋から出て行った。その背中を声も出せずに見送る。

この状況の、何もかもが不思議だった。寝て起きていたらいつも

は治っていた怪我が未だに痛むこともそうだし、何より、見知らぬ大人に優しくされるのが一番不思議だった。

ぼんやりと天井を眺めていると、やがて男と一緒に医者がやってきて、いろいろと調べられた。医者は最後に覆面男と二・三言葉を交わすと、子供に「お大事にね」と笑いかけて部屋を出て行く。

「あとしばらくは入院だって」

男は眉を下げてそう言つて、ベッドの脇に腰掛けると手元の本を読み出した。男に聞きたいことが山ほどあるが、身体が痛くて口を開くのも億劫だ。疑問がいつぱいでも、口が動かない。それに段々眠くなってきた。頭の中に靄がかかっていくようで、段々目を開けていられなくなる。

子供は男に質問することを諦めて、今は眠ることにした。

*

十月十日。

それは、とても特別な日だ。

波風ミナトは書類整理に追われながらも、四年前のことを思い出

していた。

ミナトの妻、クシナは九尾の人柱力である。その彼女と自分の間に子供が出来たと聞いたときは素直に喜んだが、同時に不安を覚えた。

尾獣の封印が最も緩むのが、出産のときだ。今まで成功例がなかったわけではないが、一歩間違えれば母子ともに命を落とすことになりかねない。クシナの笑顔を見ながら、胸中に渦巻く不安はどうしても消えてくれない。

だからこそ、ミナトは最悪の事態を免れるために様々な下準備を行った。渦の国から学んだ封印術を始めとした、様々なことを。自分たちの幸せな未来のために、多くの努力をした。

のに。

クシナの出産時、緩んだ封印から九尾のチャクラが漏れ出た。一瞬赤いチャクラが狐の尾の形を作った時は、最悪の予想が頭を駆け巡った。封印を施すためクシナのお腹に添えた手に、力がこもる。

結果として、九尾の暴走はなく、無事に漏れ出たチャクラの封印にも成功した。渦の封印術は有効だったようだ。ふっと安堵して額に浮かんだ汗を拭っていたら、三代目の奥方が取り上げた赤ん坊を、悲痛そうな表情でクシナに手渡しているのが見えた。

部屋の中がやけに静かなことに、そのとき気付いた。

赤ん坊が泣いていなかった。代わりに、クシナが泣いている。

「ナルト・・・、ナルト・・・」

まだ温かい小さな、人形のように小さなナルトを抱いて、クシナが泣いていた。何が起こったのか分からない。呆然としていると、クシナの傍らにいた奥方がこちらに近寄ってきた。

“ 九尾のチャクラが、赤子を殺したのだ。”

死刑宣告のような奥方の声が、ミナトの鈍った聴覚を震わせる。

全身の血がなくなっていくような感覚がして、ミナトは立っていられなくなつてその場に崩れ落ちた。何とか這いずってクシナの腕の中を覗きこむと、白い顔をしたナルトが、静かに眠っている。

「ナ・・・ルト・・・」

喉がひり付いたように痛んだ。金色の髪をした我が子の姿が、視界が歪む。目の前の現実を拒むように、ぐにやぐにやと歪んでいく。

「ああ・・・、ああ・・・」

クシナごと、ナルトを抱き締めた。二人の体温を分け与えて、冷たくなつていく我が子に奇跡を望むように。

しかし、ナルトが目を開くことは、なかった。

ーコン。

扉を叩く音が聞こえて、ミナトは思索から顔を挙げた。「入れ」と告げると、暗部姿のカカシが音もなく入ってくる。途端に鼻についた血の匂いに、思わず眉を寄せた。

「御苦労さま、カカシくん」

言いながら、思ったよりも帰還が遅かったな、と考える。任務の報告を一通り聞いてからその疑問を投げかけると、カカシが面の向こうで困った顔を作ったのがわかった。

「帰る途中、里の中で怪我をした子供を拾いましたので」

「子供？」

「はい。ひどい怪我だったので、病院に連れて行きました。どうやら、誰かに暴行を受けたようです」

「・・・ふむ」

何か事件性を感じる。後でフガクに調査の打診をしておいた方がいいだろうか。うちは一族が身にまとう警務部隊の制服がミナトの脳裏に思い浮かんだ。

「ちょっとあの子の様子が気になるので、見てきます。では、失礼します」

カカシが会釈して帰っていくのを見送ってから、フガクへの書類を作成しようとも思ったが、ミナトは手元の書類をまとめてファイリングし、それらを明日に回すことにした。今日はなるべく早く帰らなくてはならない。ミナトは急いで帰り支度をして、自宅へと足を向けた。

帰りにケーキ屋で小さなケーキを買って、それからカエルの小さなぬいぐるみも買った。ケーキには名前を書いたチョコプレートを付けてもらったし、ぬいぐるみはプレゼント用に包装してもらった。

ケーキを崩さないように、そこからはゆっくりと歩いて帰る。その途中の商店街で、夜目にも目立つ赤い髪を見つけた。帰り道で会えるなんて嬉しい偶然だ。よく見知った後ろ姿に、ミナトは弾む声を掛けた。

「クシナ！」

振り向いた妻は、ミナトを見つけると柔らかく笑った。

「ミナト。おかえりなさい」

彼女の腕には大きな紙袋が抱えられている。二つあるうち一つ

を彼女の手から取り上げたら、また嬉しそうに笑ってくれた。

「お仕事お疲れ様。それ、ケーキ？」

「ん、そうだよ」

彼女に見せるように掲げたが、その拍子に紙箱が揺れたのを見て慌てて腕を下ろす。中のケーキの無事が気になった。

「そのバランス感覚、火影が聞いてあきれるってばね」

「だって、食べ物の扱いには慣れてないから」

クシナの苦言に反論しつつも、なんだか情けない気持ちになる。

やがて着いた自宅に二人で「ただいま」を告げ、台所へ荷物を置くと、クシナは早速材料を広げて料理を始めた。それを横目に、ミナトは家の奥にある仏間へと向かう。仏間の中、床の間には小さな仏壇が置かれていた。その前に腰掛けて、線香に火を灯す。いつの間にかこの部屋に染み込んだ線香の匂いが、ふわりと強くなった。

ミナトが手を合わせる仏壇に、遺影はない。ナルトは、クシナの体から出た直後に息絶えた。生きて元気な姿を映した遺影を、用意できるはずがなかった。

線香の横に、買ってきたケーキが入った紙箱とプレゼントのカエルを置く。カエルも今年で四匹目だ。昨年までのカエルのぬいぐるみ三匹は、既に黒い仏壇をにぎやかに飾っていた。

しばらくすると、台所からいい匂いが漂ってくる。今日は御馳走

だ。あの十月十日以来の恒例である。クシナの料理の腕も毎年上がってきていて、どんどん豪華になっている気がする。

「ミナトー、ちやぶ台出しておいてー」

「ん！わかったー」

台所からの声に、茶箆筥の横に立てかけてあったちやぶ台を組み立てる。それは広げると狭い仏間の半分を埋めてしまった。こんな狭い部屋でごめん、と心中でナルトに頭を下げる。

廊下からカチャカチャと言う音が近づいてきたので戸を開けると、仏間の入り口に大きなお盆を持ったクシナが立っていた。お盆の上には、唐揚げやエビフライにハンバーグ、そしてカレーまで、子供が好きそうなメニューがずらり。栄養を考えてか、野菜がぎっしり詰まった大きなサラダボウルもある。クシナが重そうにしているの
で運ぶのを手伝って、食卓を二人でセッティングした。

仏壇の前に、子供用の小さなフォークとスプーン、用意された食事が全部乗ったプレートとプリンを置いて、仏壇にあったケーキをちやぶ台の真ん中に持ってくれば、準備完了だ。

「ロウソク付けてもらった？」

「大丈夫、ちゃんとあるよ」

自慢げに細いカラフルなロウソクを取り出して、慎重にケーキに四本差した。ライターで火を灯すと、薄暗い部屋にぼんやりとクシナの顔が浮かび上がる。ケーキには、「ハッピーバースデー ナルトくん」と書かれたチョコプレートがのっていた。

「誕生日おめでとう、ナルト」

「四歳ね・・・」

そんなクシナの涙声。彼女が泣いている。鼻をすすりあげ、落ちる涙を消そうと懸命に目元を擦っている。それに何の声を掛けることもできず、自分の不甲斐なさにミナトは下唇を噛んだ。

「——消すよ」

「・・・、うん・・・」

二人で口ウソクを吹き消す。

今日はナルトの四回忌で、四回目の誕生日だった。

2（後書き）

転生ものとは少し違う、並行世界を描いているつもりです。ここま
でで不適切な内容だと思われた方、お知らせください。

子供が病院に搬送されてから四日目、怪我による発熱で一時昏迷を極めたという子供の容体は安定し、食事を取る許可が下りたと病院から電話がきて、カカシは子供のもとへと急いだ。

あの子供の名前はまだ分からない。身元が判明しなかったそうだが、木の葉の中で子供の行方不明の通報はなかったし、里外で行方不明の子供とはその外見的特徴が一致しない。残る手掛かりは、子供自身が持っている情報だけとなっていた。

その子供と言葉を交わした、と言うか話しかけたのは彼を拾った次の日の夜だけだ。カカシは一瞬だけ目覚めた彼に声を掛けたことを思い出す。それ以来任務がたてこんでいて来られなかったが、今日はどうか休みをもらって昼間から病院に行けた。このチャンスに、あの子供の声をどうしても聞いてみたかった。

カカシは、なぜあの子供のことをこんなに気になるのか、自分でもわからない。金色に惹かれたのか、それとも他の理由か。考えつかないし答えを出す必要性も感じていないので、その思考はすぐに捨ててしまったが。

病院に着き記憶にある病室の扉を開けると、子供はベッドで上半身を起こして窓の外を見ていた。表情もなく窓を見つめている子供らしからぬ雰囲気、言い知れない不安がよぎる。怪我をされていて元気なはずはないが、子供は明るい方が安心するものだ。

「やあ」

こちらに気づいていない様子の子供に声を掛けると、弾かれたように綿毛のような金色がカカシへ振り返った。青空の青より濃い色の瞳が、驚いたのか見開かれている。

「やつと起きられたんだね。よかった、安心したよ」

返事をする様子がない子供に話しかけながら近づき、ベッドサイドのパイプ椅子に腰かけた。相変わらず驚いた顔のままの子供にニコツと笑いかけるが、表情に変化はない。困ったな、と内心焦る。どうコミュニケーションを図っていいか分からなかった。もともカカシは子供が苦手だし、人に積極的に声を掛けるタイプでもない。どうすればいいか迷いに迷って、カカシは自分の顔を指差した。

「オレ、はたけカカシって言うんだけど、名前」

「・・・カ、カシ？」

「そう！カカシ」

子供が口を開いたことが存外に嬉しかった。いつもはのらりくりとした調子を保っている声が弾む。

「お前の名前はなんてーの？」

「うずまきナルト、だってば」

上機嫌のまま聞くと、金色の子供は名乗った。ナルト、と口の中で何度か確認して、子供の名前を心に刻みつける。

「ナルトね、よろしく」

「うん、カカシ、にーちゃん？」

「カカシにーちゃんか。悪くないねー」

ずっと大人に囲まれて育ったカカシは、兄と呼ばれることには慣れていない。どこかこそばゆい気持ちに嬉しくなつてナルトの頭を撫でて、見た目の印象よりも柔らかい毛触りに、思わず確かめるようにもうひと撫で。

「や、やめろつてば」

「えー」

照れたのか顔を赤くしてカカシの手を振り払うナルトが、急に子供らしく見えてホツとした。しかし手を振り払われたのが本気で残念で不満を口にする、ナルトにはプイツとそっぱを向かれてしまった。

そうやってナルトとじゃれ合っていると、看護師が食事を運んできた。何度か入院生活をしているカカシには見慣れたカートから出されたのは、たまご粥とほうれん草のお浸しという、非常に質素なものだ。今まで体力が落ちていた所為で食事どころか水分も点滴で取っていたので、それは子供にとって少なくとも四日ぶりの食事だった。少々質素すぎる気もしたが、空っぽの胃には丁度いいのだろう。

ナルトは久しぶりの食事に興味津々の様子だった。

「ゆっくり食べるのよー」

柔和そうな中年の看護師の言葉に、ナルトは大きく頷いている。しかしその視線はまだ粥に注がれたままだ。お預けされた犬のように笑ってしまった。

看護師が出て行くのを見送ってから、ナルトは左手でスプーンを持った。右手は骨にヒビが入っているため、ギプスで固められているので使いものにならない。それがわかっていても、一瞬右手でスプーンを取ろうとしたのを見て、ナルトは右利きなんだな、と推測する。

案の定左手では食べにくらしく、スプーンにのせた粥がほとんど口に入っていないで、ぼろぼろ零れて行く。「あら」眉を下げて、見かねて器とスプーンをナルトから取り上げた。

「あ、オレのだってばよ！」

「分かってるよ。食べさせてあげるから、ね？」

カカシのその言葉に、ナルトはほけつと間抜けな顔をした。その顔がどうにもおかしくてくすくす笑うと、馬鹿にされたと思ったのか、ナルトの丸いほっぺがさらに丸く膨らむ。さらに笑う要素にしかないことを、この小さな子どもは気付いていない。

「さー、食べよーね」

手の中の小さいスプーンは、カカシの大きな手では存外に扱うのが難しかった。忍具の扱いは人一倍上手いこの手にも、向いてないことがあったなんて。落胆よりはくすぐったい気持が溢れて来る。

もし自分に子供が出来たら、こんな気持ちになるんだろうか。

「はい、アーン」

ナルトは未だにほっぺを膨らませていたが、目の前に出されたスプーンにそれをしばませて、パクツと食いついた。

「おいしい？」

「・・・味があんまねえってばよ」

「ま、病院だしね。我慢するしかないよ」

もぐもぐと口を動かすナルトを見ると、雛鳥に餌をやる親鳥のような気分になってくる。特に悪い気はしない。むしろ、もう数年来感じていなかった気持ち溢れてくる。

野菜は苦手だと難しい顔をしたナルトのために、看護師から借りた果物ナイフでほうれん草を細かくし、たまご粥に混ぜた。緑色になった粥にナルトはさらに苦い顔をしたが、口にしてみると思ったよりおいしかったらしく全部平らげてくれた。空の器に満足して頷く。

「カカシにーちゃんは、ご飯は？」

デザート代わりに乳酸菌飲料のパックのストローを吸っていたナルトが、おもむろにそう聞いてきた。実は何も食べていなかったが、「大丈夫よ」と誤魔化す。子供に入らない心配をかける必要はない。

そこで、思い出したようにカカシは一つ手を打った。

「そーだ、ナルト。ちょっと聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

カカシの足取りは重い。今は病院から家への帰途についているところだ。その歩きは速さこそ通常通りだったが、足を動かすのが億劫でしかたなかった。足を動かすことより、頭を働かせることに集中してしまいたい。

あの食事の後、ナルトの身元をはつきりさせるためどこに住んでいたのか直接聞いてみた。子供と言えど、何か手掛かりになることを言ってくれることを期待して。そして、それに対して思いのほかハッキリとした答えが返ってきた。その内容が、「三代目のジツチヤンのおうちだってばよ」じゃなかったら、素直に喜べたものを。

「三代目のジツチヤン」とは、猿飛ヒルゼン様のことだろう。今は引退しているが、かつて三代目火影としてこの里を仕切っていた御仁だ。“自分には両親がいないから三代目の屋敷に住まわせてもらっていた”とナルトは言っていたが、おかしい話である。両親がいない子供が育つ場所なら、木の葉にだって孤児院という場がある。なにより、三代目の屋敷に孤児が身みなしこを寄せていたなんて話、聞いたこともない。それがもし事実だとすると、暗部に所属している自分の耳に噂としてでも入ってこないとは、奇妙だった。

さらに誰に暴行を受けたのかも聞いてみた。これが一番重要な質

問だったが、それにナルトは「覚えていない」の一点張りだ。

（もしかしてナルト、記憶喪失とか？んー、今度調べてもらわないとなぁ・・・）

カカシは頭を抱えた。あの子供について、わからないことが多過ぎる。いろいろと調べる必要があった。

カカシの足は、いつの間にかナルトを見つけたあの路地に向かっていた。何かわかるかもしれない。そんな淡い期待が働いたのだろうか。記憶を頼りに向かったその先、果たして無人だと思われたそこには、意外な人物がいた。

「ミナト先生」

四代目火影と刺繍された白い羽織姿の彼が、路地の隅に膝をついていた。驚きを込めて名前を呼ぶと、ミナトは緩慢な動作でこちらを振り向く。キラキラと水面の夕日のような金髪が揺れた。

「カカシくん、どうしたの」

「先生こそ、どうしたんですか。ここに何か？」

「ん、ちょっとね。君は？」

僅かに眉を上げて口端を上げたその表情の動きに、自分には明かせない何かをしているのだと悟った。一見してその心情は読めない彼の柔和な笑顔の裏に何が隠れているのか、興味がないと言ったらウソになるが、少しだけ低い位置にある彼の薄青い瞳を見詰めていても何も読み取れなかった。里長ともなれば、感情のコントロール

すら自分の手の中なのだろう。さすがだ、と素直に感嘆した。上忍として、暗部として日々その実力を里に知らしめているカカシだったが、ミナトと比べればその名声も精彩を欠く。若くして天才と呼ばれたことは共通していても、彼の輝きに自分は遠く及ばない。

気付けばミナトを探るようなことをしていた。そんなことをすれば、一発でばれてしまうことは彼の班にいたころから知っている。仕方なく、カカシは素直に質問に応えることにした。

「オレは、この間拾った子供が倒れていたのがここなので、見に来ただけです」

「子供って・・・、ああ、前の任務のときに言っていたアレだね。警務部隊にはその子のこと言っただけ？」

「ええ、一応」

何を隠そう、ナルトの身元の確認を取ったのは警務部隊の面々だ。身元不明の子供と言うことで、今度取り調べに来るらしい。確かに誰かに暴行を受けた様子のナルトは重要参考人だろうが、まだ小さい子供への対応としては少し大げさすぎる気もする。それを含めた非難も込めてミナトに言うと、彼の笑顔に微かに翳^{かげ}が走った。それはカカシでも読み取れるかどうかかわからない微妙な変化。しかしその変化は一瞬で、すぐに彼の笑顔はいつも知るものに戻った。

彼が表情を崩した。それが、カカシに妙な不安をもたらす。

「わかった。フガクに言っておくよ」

「ありがとございます・・・」

「それじゃあね、カカシくん」

瞬身で去っていくミナトを見送って、カカシは胸に残る妙な違和感を確かめるように息を吐く。

（こういう第六感的なものは信じない質なんだけどね）

言い知れぬ胸騒ぎが、カカシの中で渦巻いた。

*

ナルトは、カカシが出てったあとゴロンとベッドに横になって、彼の笑顔を思い出していた。

自分に優しくしてくれる大人は、三代目のジツチャンだけだとかかり思っていたのに。カカシと言う人は、里人皆に嫌われている自分にあんなに優しい。ぽつと胸の辺りがあつたかくなった。これが嬉しいってことなのだと思う。

カカシが撫でてくれた頭を自分でも撫でてみる。当たり前だが自分の手は彼のよりも半分くらい小さくて、同じ感覚は得られなかつ

た。

また来てくれるかな。また撫でてくれるかな。手を振り払ってしまったから、もしかしたらもうやってくれないかな。

でも、カカシなら何となくやってくれる気がする。

さっき別れたばかりの銀髪に、もう会いたくなってきた。

今度は、いつ会えるだろう。

3（後書き）

ナルトとカカシが仲良し過ぎな気がします。ほのぼの要素がこの二人しかないので。すみません・ちなみにカカシはこの頃18歳くらいかと思われます。

―カツカツツカツカツツ

「ん・・・？」

鳩が窓のガラスを叩く音が目覚ましだなんて、今日の目覚めはあまりよくない。ミナトが身を起こし窓に視線をやると、見慣れた白い忍鳥がまだ窓ガラスを突いている。まだ夜明け前だというのに、どこからの伝令だろうか。

寝起きで固い筋肉を動かして立ち上がり、窓を開けて忍鳥を招き入れた。足に結えられた書類を広げて目を通す。忍鳥は書類がミナトの手に渡ったのを確認すると、窓から再び飛び出して行った。

「・・・」

読み進めるにつれて、寝起きの霞かかっていた意識が覚醒していく。何度か文面を目で追い内容を頭に叩き込んでから、ぐしゃりとその書類を手の中で潰して風遁で粉々に裂いた。紙片は床にばらまこうと思ったが、後で掃除するクシナの洪面を思い浮かべゴミ箱に突っ込んだ。

クローゼットから出した忍服に着替えて、“四代目火影”と背中刺しゅうされた羽織を着ると、その音に目を覚ましたらしいクシナが布団から半身を上げたようだった。背後で動いた気配に、彼女の方を振り向く。

「もう仕事？」

眠そうに目を細めているクシナは、羽織姿のミナトを見てそう言った。

「うん。ちょっとね」

「そう・・・」

落胆した様子のクシナに、ミナトは肩をすくめて見せる。

「なるべく早く帰るから」

「・・・大丈夫よ。ミナトは火影だからね、がんばって」

言いながら、クシナの手がミナトに伸びて、羽織の紐をきゅっと結んでくれた。昨夜ナルトのことを思い出して心細いだろうに、気丈に笑う妻が愛おしくて、感謝をこめて彼女の細い肩を抱き寄せ、「行ってくる」と小さく言って寝室から玄関へと向かう。

途中で通り過ぎた仏間を覗きこむと、昨日四匹に増えたカエルが笑っているように見えた。天国のナルトに届いていればいい。そう願ひ、仏間で一度だけナルトに向かって手を合わせた。

「行ってくるよ、ナルト」

瞬身の術を使い火影室まで行くと、中は暗かったがマント姿の小柄な暗部が立っていた。彼は今日、火影を警備する忍であったと記憶している。その横には特別上忍が二人、書類らしき何かを持ってそこにいた。

「詳しく聞かせて」

「はっ」

忍が話す内容は、先ほどの伝令の内容とほぼ一緒だ。改めて突き付けられた事実に、眉をひそめて不快感を表す。

「侵入者だって？」

「はい。侵入したのは昨日の夕方から夜の間だと思われていますが、結界班は察知が遅れたようです。侵入されたことに気付いたのはつい先ほどで」

「どういこと？」

「急に、進入路の形跡もなく侵入者は突然現れたそうです。察知が遅れたのは門外に張られた結界に引っ掛からなかったからでしょう。時空間系統の忍術で侵入したと考えられます」

「時空間忍術ねえ。どうやったのかな」

ミナトは顎に手をやり、小さく疑問を呟いた。

木の葉隠れの里の結界は、侵入を察知するだけのものではない。忍術による外部からの干渉をある程度ではあるが防ぐことも考えら

れて作られており、その管理のために常に四・五人の術者がそれを最適の状態に保っている。時空間忍術ももちろん例外でなく、そんなもので侵入したとなれば結界に引掛からないはずはない。むしろ結界を通り過ぎようとしたときに、忍術は解除されてしまうことが考えられる。結界班がぬかったのか、もしくは木の葉には知られていない新たな忍術か。

どちらにせよ、警戒を強める必要がある。

「で、その侵入者は捕獲したの？」

「いえ、まだ侵入者の正体がつかめていないのです。いま探知系の者を使って探させています」

「目星は付けている？」

「いや、それは・・・」

特別上忍は口ごもる様子を見せた。それは予測できた反応だ。恐らく、特殊な侵入方法で入ってきた相手である。幸い、今のところその侵入者は表立った行動を見せていない。今は、存在がわかっただけでも上々と考えた方がいいだろう。

ミナトはそう結論付けて、特別上忍に指示を出した。

「わかった。搜索班を編成して全力で侵入者を探して。人選は君に任せる。報告は迅速に。いいね」

「了解しました」

一人が頭を下げ、火影室から下がっていく。残った忍のもう一人は、ミナトに書類を渡してきた。

「時空間忍術の可能性が高いので、その道のエキスパートである火影様に意見をいただきたいです」

結界班の一人だった。

「ん。結界班ではどこまでわかった？」

「侵入者が突然現れた場所は大方判明しています。そこに異質なチャクラの乱れがありました。ですが、その後の足取りは掴めていません」

彼の説明を聞きながら、手渡された書類に目を通す。里の大通りから見た裏通りの辺りに、赤い筆で印が付けられていた。そこが侵入者が出現したポイントらしい。

「この辺りの調査はどこまで進でるんだ」

「今ゐの伍班が進めております。明日には報告できるかと」

そう答えたのは暗部姿の忍だ。獣面に目を向けると、彼は小さく頭を下げた。

「ん、わかった。俺も行くよ。テンゾウ、ついて来て。君も」

「は」

「仰せのままに」

結界班の忍と暗部、テンゾウがそれぞれ反応したのを確認してから、火影室を出る。外に出て空を見上げると、既に夜が明けていた。暗い夜空から紫色の朝焼けとなった空は美しい。

十月十一日の朝も、いつもと変わらず訪れた。

4（後書き）

暗部の班名は作者の捏造なので、あしからず。また、原作の設定を様々自己解釈して記述しております。全てが事実ではありません。

これから活動報告で更新の報告をしていこうと思います。よろしければチェックしてやってください。

要らぬ混乱を避けるために、侵入者の情報はごく限られたものだけにしか知らされなかった。里の周りを固める忍たちにも、警備を厚くしろ、と言う事務的な命令だけが届けられた。相手の出方がわからない以上、里を無闇に色めき立たせるのは危険だという判断がされたからだ。三代目やダンゾウ、相談役の長老たちもそれに同意し、今日も里は平穏な様子を見せている。

あの裏路地を調べた調査班の報告として、侵入者が現れた場所からその手掛かりとなるものは発見できなかったらしい。人が多い表通りが近いため、忍犬の鼻も侵入者を特定できない上、忍が侵入したことを考えれば当然であるが、それらしき足跡も残っておらず、手掛かりとなったのは僅かなチャクラの乱れだけだ。しかし、それすらもとすれば見逃してしまいそうになる僅かな残滓でしかなく、そこに“何かが現れた”と言うことの証明しかしてくれない。

岩礁に乗り上げた。そんな表現がぴったりの状況に、ミナトは深いため息を吐いた。

数日経つても、手詰まりを見せていた状態に変化はなし。今も捜索班は動いてくれているが、当てがないために報告書はいつも白紙に近い。忍五大国最大の火の国が抱える木の葉隠れの里に侵入を許し、あまつさえ情報が盗まれるような事態にとまれば、里の信用はガタ落ちだ。里の住人全員の生活に影響が出ることになる。

早く何とかしなくては。その焦りを拳の中で握りつぶし、仕事の合間の気晴らしと称してミナトは例の裏路地に来ていた。自分は生憎感知系の能力は持ち合わせていないので、ここに来たところで何

がわかるというわけではない。精神安定の一環と言ったところか。

ここに“何”が現れたのか。膝をついて探るように地面を撫でる。手のひらに伝わる土の感触が腹立たしかった。

そのとき、こちらに近づいてくる気配を感じた。よく知るその飄々とした気配に、その体勢のままこちらに来るのを待つ。

「ミナト先生？」

案の定掛けられた声は聞き覚えのある低い声だ。ゆっくりとこちらに振り向くと、カカシが呆然とそこにいた。まだ少年の域を出ていないがそれでも青年然としているカカシは、気付けばミナトより背が高くなっている。立ち上がって僅かに見上げた視線に、時の流れを感じた。

「カカシくん、どうしたの？」

「先生こそ」

驚いた様子を見せていたカカシだったが、ミナトの笑顔に気が緩んだのかすぐにその表情は引っ込んだ。片目しか出ていない顔だが、その割には表情豊かだ。

「ん、ちよつとね。君は？」

カカシは暗部に所属しているが、それでもそうやすやすとこの案件を明かすことは躊躇われた。明らかにごまかしているようにしか聞こえない科白だった所為だろう。カカシの視線がこちらを見透かそうと揺れる。表情の動きや視線の運び、心拍数や呼吸の回数に発

汗。探る要素は多いが、そんな隙を見せる気はない。それ以上踏み込むことをやめさせるために笑うと、カカシは我に帰った様子を見せてミナトの質問に応えた。

「オレは、この間拾った子供が倒れていたのがここなので、見に来ただけです」

その言葉に、カカシが任務の報告のときにそんなことを言っていたそと帰ったことがあったのを思い出した。珍しく帰還予定時間を超えて帰ってきたからよく覚えている。それに、あの日は十月十日だった。

「実はその子、身元が不明だったんです。それで警務部隊の人たちが事情聴取するとか言い出して。まだ子供なのに」

不快感をあらわにして警務部隊への非難を言うカカシは、ミナトに警務部隊へそんなことをしないように進言してくれ、と言外に言っているようだ。それを察したが、ミナトは耳に入ってきたあるワードに意識が行く。

「身元不明」、それに引つ掛かりを覚えた。不審に思ったのが一時^{とき}顔に出たかもしれない。カカシが僅かに目を見開いたのを見た。

「わかった。フガクには言っておくよ」

隙が出来た。笑って取り繕って、カカシの前から瞬身で姿を消す。

“身元不明の子供”が、“十月十日”にあそこで拾われた。今回の件と無関係とは思えないその事実、ちりつと頭の隅が焼けるような感覚がした。その子供、どんなに歳や体が小さくても、忍である

ならば関係ない。事実、まだほんの6歳のときに中忍なった力カシの例がある。

僅かに見いだせた解決の糸口に、頭がスパークするように今後のことを練り出した。

フガクと連携を取らなくては。そう考え、ミナトは里の中を駆け抜ける。

5 (後書き)

不穩になってまいりました・・・。

ナルトの怪我の経過は順調なようだ。骨折していた右手も、腕をそこまで動かさなければ指が使えるとわかって、ナルトはあれ以来カカシや他の人の手に頼らず、自分で食事をしている。

と、主治医から聞いた。

またあれから少し間が空いて病院を訪れたカカシは、ナルトの主治医と会っていた。今は先日感じたナルトの違和感について調べてもらおうと、院内の廊下で主治医にその旨を説明している最中だ。三代目にはなかなかおいそれと会えないので確認はとっていないが、あの「三代目の家の離れに住んでいる」発言は正直言って信憑性ゼロである。あれが嘘だとしたら、子供特有の妄想か、それともこの前予想を立てた記憶の欠乏か。どちらか分らない以上、カウンセリングを受けさせてほしい、と言うことを主治医に相談していたのだった。

「わかりました、手配しておきましょう。もし記憶喪失ならば、治療を進めるうちにあの子の身元もわかるかもしれませんね」

主治医はそう言っただけ承してくれた。よかったとホッとして「では」とナルトの所へ向かおうとすると、「ちょっといいですか」と軽く引きとめられた。

「はい？」

「はたけさんはお忙しいとは思いますが、なるべくナルトくんに会

いに来てもらえませんか？ナルトくん、あなたが来なくてとても寂しそうでした」

「そ、そうですか？」

主治医に言われた言葉に、カカシは不謹慎にも喜んでしまった。ナルトは自分がいなくて寂しかったのか。そう思うと、あの子に好かれているのではと期待してしまう。実際嫌われてはいないと思う。まだあまり同じ時間を多くは共有していないが、これから増やしていこうと、ひそかに決意したカカシだった。

主治医と別れてナルトの病室に行くと、窓際のベッドでナルトは絵を描いていた。大きめの画用紙に、不自由そうにギプスで固められた右手を動かして絵を描いている。子供にわかるようにわざとらしく足音を軽く立ててベッドに近づくと、ナルトはこちらに気付いて顔を上げた。ぽっとその顔が明るくなったのは、気のせいではないはずだ。

「カカシにーちゃん！」

カカシの名を呼びながら笑顔を作ったナルトに、カカシは目尻が下がる思いだ。こんなに嬉しそうに名前を読んでもくれるなんて、嬉しくないはずがない。

「ナルト、久しぶり。ごめんなー、しばらく来られなくて」

「んーん！だいじょーぶだってばよ。病院の人、みんな優しいから」

そう言いながらニシシと笑うナルトは、前会った時よりずいぶん明るくなったようだ。どうやら看護師たちに人気者らしいと先ほど

主治医に聞いたが、その影響だろうか。

「絵描いてるんだね。何描いてるの？」

いつも通りベッドの横のパイプ椅子に腰掛けながら聞くと、ナルトは自慢げに画用紙を広げながら「四代目！」と誇らしげに言った。真ん中に書かれた黄色と肌色の何かは、四代目火影である波風ミナトであるようだ。子供の芸術センスは、カカシにはよくわからなかったが。

「へえ、よく似てるなー」

こう言うておけば大丈夫かな、と打算的に言葉を紡ぐ。そんな大人の内情など分かるはずもないナルトは褒められて御満悦だ。

「四代目が好きなの？」

「うん！大好きだってばよ！だってさだってさ、四代目火影ってすごいエイユウなんだろ？」

その言葉に第三次忍界大戦でのミナトの活躍を思い出して、カカシは頷く。あの人が戦場に現れるだけで味方の士気は自然に上がった。木の葉の黄色い閃光という異名を戴く彼にかかれば、どんな不利な戦況もひっくり返る。一人で千人分の働きをしたと言っても過言でない彼の活躍は、英雄と呼ぶにふさわしい。

「前キュウビっていう妖怪を退治したのも四代目だろ？」

「……ん？」

キュウビ？九尾？

カカシの脳裏にミナトの奥方であるクシナの明るい顔が浮かんだ。彼女は九尾の人柱力だが、封印したのはミナトではない。クシナに九尾がいれられたとき、ミナトはまだ忍にもなっていなかったはずだ。

まただ。ナルトの妙な発言。事実と食い違う内容に、カカシは首を傾げる。

「九尾を封印したのは四代目じゃなかったと思うけど」

訂正の意味を込めて言うと、ナルトは「え！」と驚きの声を上げた。

「だって、三代目のジツチャンが、四代目は命を張って里を守ったって言ってたってばよ？」

三代目ジツチャン情報か。ナルトの中の世界が少しばかり繋がったが、わかったことに対して、分からないことの方がはるかに多い。カカシは、少しだけ話を合わせてみることにした。

「火影様だからね、里を守ってくれるよ」

「なー！かつこいいってばよ！オレも一回会ってみたかったなー」

「ふーん、それじゃあ今度、会えるかどうか聞いてあげるね。実は四代目はオレの先生なんだ」

会話の流れで出た何気ない提案に、今度はナルトがカカシに向か

って首を傾げた。

「でも、四代目って死んでるんじゃないの？」

「は？」

あまりに素っ頓狂な発言に、素っ頓狂な声で反応してしまった。忍らしくないと反省したが、すぐに思考はナルトの発言の考察へと移行する。四代目は死んでいる？そんなはずはない。ミナトは今でもピンピンしている。この間も会話を交わしたばかりだ。なぜナルトの中でミナトは死んだことになっているのか。

（やっぱり記憶に何か問題でもあるのかなー。ここまできると妄想とは思えないし）

ここまで一貫して食い違っているとなると、子供の想像の範疇を超えているのではないだろうか。そうなるとやはり怪我をした際に記憶になんらかの欠陥や事実との齟齬そごが発生するような打撃を受けたのか。はたまたそう言う記憶障害か。

考えるだけでは分からない。腑に落ちない点が多いが、ナルトと話していること自体は楽しいのだから素直に楽しんで置こうと半ば諦めにも似た心境で、カカシは「そうだねー」と適当な相槌を打った。ナルトの中では相変わらず四代目が死んだままだったが、そろそろ訂正するのが面倒になってきていた。

「そういえば、お前って歳いくつなの？」

もっと早く聞かなければいけなかった気もするが、今更思いついて聞いてみた。ナルトは一瞬考えて、左手で指折り数え始める。その必死な様子は微笑ましく、気が付けば力カシはまた笑っていた。血生臭い暗部の任務ばかりで荒んでいた気持ちだが、ふわりと広がって温かくなるようだ。こんな穏やかな時間が自分の手にあるなんてにわかには信じられないが、ふわふわと揺れるナルトの金髪を見ていると、少しずつ実感が湧いてくる。自分の中に広がるその想いが、段々と大切なものになってきていた。

ナルトはやがてカレンダーに目をやった後、自信満々に「四つ！」と指を四本立てた。

「このまえ四歳になった！」

「この前？この前っていつ？」

「んつとねんつとね、十月じゅうにち！」

十月“とおか”だよと内心で突っ込みながら、カレンダーの十月十日に目をやる。その日は、確かナルトを拾った日だ。あの日が誕生日だったのか。災難な誕生日だ。それが不憫に思えて、力カシはあることを思いついた。

「遅れちゃったけど、誕生日のお祝いやるうか」

「おいわい？」

「そう。ケーキとか、プレゼントとか用意して、一緒にお祝いしよ

う?」

「……」

ナルトが黙り込んだ。青い瞳がきゅつと影を落としたのを見て、何かまずいことを言ってしまったかどうかと自分の発言を振り返った。特に問題があるようには思えない。焦って「どうしたの?」と聞くと、ナルトは小さく首を振った。

「本当に、おいわいしてくれるの?」

「うん、するよ?ナルトは嫌?嫌なら、」

「ううん、ううん!嬉しいってばっ」

今度は大きく首を振ってカカシの言葉をさえぎると、ナルトは泣き笑いのような複雑な表情を作った。四歳の子供が作る顔にしては複雑な色が多過ぎる感情が読み取れて、胸に小さな痛みを覚える。

「オレさ、たんじょうーびっていわってもらったことないから、嬉しいってばよ!」

「ナルト……」

そう言えば両親がいなかったと言っていた。そうなれば、親の愛情を十分に受けずに育ったのかもしれない。代わりに愛してくれる人にも事欠いていたのかもしれない。そう言えば、ナルトは自分の歳を四歳と言ったが、それにしても発育が良いようには見えない。カカシは言動がしっかりしている分、その小さな体に疑問を持っていた。今は包帯に隠されている、痩せた細い手足や四歳にしては小さな体。

前訪れた時に病室から窓の外を眺めていたその顔は、大人びていたのではない。ただ、何もなかったのだ。

カカシは小さく決意を固めた。

「とびきりのお祝いをしよう。明日でいいね？」

「うん！楽しみだつてばよー」

太陽みたいに笑うこの子を、守りたいと思った。

6・5 幕間（前書き）

少しでも昔の話。幕間になります。

6・5 幕間

午後を告げる鐘が、莊嚴な響きを里に撒き散らしていた。ふと見上げた青い空は、秋のらしくスツと高く、雲ひとつ見当たらない。夏から数えてもう一月ほど、弱まった太陽の光が、その空の中で唯一の役者だった。

カカシは空から視線を移し、目の前にある小さな家屋を見上げた。決して大きくなく、こぢんまりとしているが、その佇まいにカカシは父と過ごしたかつての我が家を思い出した。そんな、懐かしい雰囲気がある。ここは火影に就任してまだ幾年も数えていない四代目、波風ミナトが、これからを家族とともに過ごししていく家だ。

その家族の訃報を聞いたのは、つい昨夜のことだった。ミナトが私信用に飼っている小鳥が伝えてきたそれに、居ても立ってもいられずここに足が向いた。自分に何が出来るとも思えなかったが、とにかく何かしなければと思った。

「カカシくん、来てたの？」

力ない声に振り向けば、買い物袋を下げた四代目火影、波風ミナトが門のところに立っていた。忍服と微妙に形の違う真つ黒な服に身を包んでいる。見覚えがあるそれは、かつて自分も着たことがある喪服だ。その姿に、あの伝令が事実なのだと言われている気がした。どこかで、信じていない自分がいたのかもしれない。ふくらんだお腹を幸せそうに撫でていた彼の奥方のことを思い出すと、まさかそんなことになったなんて想像できなかった。

彼に中に入るように促されて、カカシはそれに従い中に入る。家の中は妙にガランとして、静かだった。前来た時も決してにぎやかではなかったけれど、こんな風に底冷えするような空気が滞っていただろうか。家主の不幸に、家も落ち込んでいるのかもしれない。

カカシがらしくないことを考えながらミナトに着いて居間に行くと、部屋の隅にベビー用品が積んであるのを見つける。中には先日、自来也からもらったのだと嬉々として語っていた大きなベビーベッドもあった。

「捨てるんだ」

「え？」

カカシがそれを見ていることに気付いたのだろう。ミナトを振り返ると、見たことないような顔で彼は笑っていた。

「クシナが帰ってくる前に、全部捨てる」

「でも」

「毎日。泣いているんだ」

「……………」

「これ以上、苦しめたくない」

この人は、こんなに歳を取ったような顔をしていたかな、と唐突に思った。

買った物袋を台所に置いたミナトは、その動きの流れでお湯を沸かし始めた。師の見たことのない憔悴ぶりに、掛ける言葉が思いつかない。

なぜ自分はここに来たのだろう。カカシは、自分の浅はかさを呪った。忍としていくら優秀でも、まだ成人もしていないヒョッコに何が出来る。自分も親を失っている。家族を失った苦しみなら理解しているつもりだったが、理解したところで自分が大人になった訳ではないのだ。

たとえばミナトの師である自来也ならば何と言っだろう。綱手なら、三代目なら、何と言っだろう。考えても考えても、カカシの頭にふさわしいと思える言葉は浮かんでこなかった。

「座ったら？」

こちらを振りかえらず、ミナトが言った。それは命令だ。長い間彼の部下として、弟子として過ごしたからこそわかるその言葉の響きに、カカシは素直に従うしかない。居間にある椅子にそつと腰掛ける。椅子が板の間をする鈍い音が、嫌に家の中にこだました。

少しして、ミナトがお茶を持ってきた。「いただきます」と小さく言って口に含んだお茶は、舌がしびれるほどに熱かった。

「うわ、熱いつ」

そう言っただのはミナトだ。カカシの向かい側に座ってからお茶を飲んで、その熱さにやられたらしい。

「ごめんね。お茶なんて普段あまり淹れないから」

そうであっても、ミナトにしては珍しい失敗だった。苦笑するミナトに、カカシは曖昧に「いえ」と答える。

何か言っべきだと思うのに、口は石膏で固められたようにうまく動いてくれなかった。それでも、何とか考え出した言葉を紡ごうと、重い口を開く。

「……先生あの、」

「もう、産んじゃいけないんだって」

唐突に言われた科白に、言おうとしていた言葉がカカシの頭から抜け落ちる。ミナトは薄く笑ったまま、今日の空の色のことを話すみたいに気軽な口調で続けた。

「九尾のチャクラを、これ以上危険を冒して外に放出するようなことはできないってさ」

何でもないことのように、ミナトは淡々と語っている。

「俺が出来なければ、他の人間には出来ないだろうって」

ドクンと、耳の後ろ心臓があるみたいに鼓動が跳ねた音が聞こえた。

「だから、もう諦めろってさ」

そこで大きく息をついて、ミナトは少しか冷めたお茶に口をつけた。そして右方向にある窓に視線を移す。

「なんでかなあ」

「先生……」

「なんで、かなあ」

ミナトが、泣いているんじゃないかと思ったけれど、その双眸は乾いていた。その代わり、瞳の色がいつもの綺麗な青に見えない。汚泥に青い絵の具を混ぜたみたいな、精彩を欠いた色が、何を見るでもなく窓の方向を見つめていた。

「ごめん。こんな話して」

何も言えずにいると、ミナトが突然手を打ってそう言った。途端に彼の表情は明るくなる。いつものミナトだった。

「カカシ、来てくれてありがとう」

「すみません、オレ、何も出来なくて」

「……ありがとう。そう言ってくれて」

だから泣かないで、と掛けられた言葉に、はじめて自分が泣いていることに気付いた。

その後、クシナが退院したのち、ミナトたちは夫婦二人きりでさやかな葬儀を行ったと聞いた。それから数日を数える頃にはミナトは火影として普通に働き始め、道端ですれ違ったクシナは明るい様子だった。

こうして日常が戻っていく。そのうちカカシも、師の子供が死んだことをあまり思い出さなくなっていた。子供の名前を聞かなかったことも、忘れていた。

6・5 幕間（後書き）

補足的な話。カカシは死んだナルトをよく知らなかったんです。死産の子どもは普通親族以外を呼ぶようなお葬式もしないですから、遺体と対面もしませんでした。

この場面、もともとはプロットを立てた時点ではない話でしたが、カカシがナルトのことを知らないってのが自分の中でどうにも納得できない部分でして、急遽付け加えました。

うずまきナルト。

その名がうちはフガクの口から伝えられたとき、ミナトは何かの冗談ではないかと疑った。しかし、資料にも確かに黒い墨で書かれている名前は“うずまきナルト”で間違いなかった。

警務部隊は予定通り身元不明の子供に、彼が入院している病院で事情聴取を行ったそうだ。ただ子供の見た目が予想外に幼かったのもあり、尋問班が用いるような手段や写輪眼を使用した聴取ではなく、あくまで小さな子供に何があつたのかを聞く程度に納めたらしい。その際に交わされた内容が書かれた書類が、今ミナトの手の中にある。

「……はは」

おちよくっているのだろうか。怒りとも悔しさとも分らない感情が筋繊維を駆け廻り、その余波で手の中の書類がぐしゃりと歪んだ。報告に来ていたフガクが怪訝そうに声を掛けてきたようだったが、耳には届かなかつた。彼の存在すら一瞬忘れるほどの激情。自分でも珍しいと思える感情の高まりに飲み込まれそうになり、唇を噛むことでそれを何とか抑えた。加減をする余裕がなく、犬歯が食い込んだ唇は大げさに切れて口端から血が垂れる。

「火影様！？」

暗部の男が異常を察したらしく荒い声を上げた。切れた唇から感

じたのはほんの僅かな痛みだったがそれでもミナトを冷静にしてくれて、こちらへ寄ろうとしていた暗部を手で制す。血を手の甲で拭き取ってから、何も言わず立つフガクに目を向けた。

「この子供、忍か？」

声が硬い。駄目だ、落ち着け。

「……一見しただけですが、その可能性は低いでしょう。普通の子供でした。ですが、術式の類を仕込まれている可能性もあるので、注意するに越したことはないかと」

フガクは淡々と必要事項だけ、書類の文面通りに報告してくる。

普通の子供？そんなはずがない。普通の子供が、“うずまきナルト”なんて名乗るものか。

うずまきはクシナの旧姓だ。ナルトと言う名は、ミナトたちの間にできた最愛の息子と同じ。しかし、生まれた直後に天国に行ってしまった、生きてこの腕に抱くことが出来なかった息子。

この“うずまきナルト”は、息子と年齢まで同じと来ている。ここまで質が悪い侵入者は初めてだ。“あちら”は現火影のことを調べ上げ、どんなことにこちらが動揺するのか分かり切っているように思えた。歴代屈指の火影と呼ばれたミナトが、どうすれば陥落するのか、あちらは考えたはずだが。

その策が、これか。

「……俺が直接会いに行く」

それは、自分でも初めて聞くような低い声だった。フガクは瞠目したが、何も言わず「仰せのままに」と深く敬礼した。

暗部の護衛もフガクの付添いも断って、一人で病院への道歩く。瞬身で行くことも考えなかったわけでないが、高ぶった感情をそのままに子供に会うのは躊躇われた。少し、時間が欲しい。

冷静にならなくては。震える拳を握りこみ、漏れ出そうになる殺気にも近い自分自身を閉じ込めようと息を整えた。しかし吐く度に漏れ出る熱いものが、自分を落ち着かせてくれるとは到底思えない。らしくない。落ち着け、落ち着くんた。あの子供に会うのだ。隙を見せるな。

里のトップとは思えない火影の葛藤に、自嘲の笑みがこぼれた。

（そうだ、俺は火影だ。これくらいで、動揺するな）

ぎゅっと一度、目をつぶって視界を改める。少しでも先ほどより気分が良くなったようだった。周りを気にする余裕が出てきて、深く息を吐いて呼吸も平生に戻す。そうすることで心なしか開けた視界に、見慣れた銀髪を見つけた。正直声を掛ける気にはならなかったが、彼は“うずまきナルト”と深くかわっている。なにか探りを入れるのもいいだろう。

「カカシ！」

できるだけいつも通りの笑顔を意識してカカシへ声を掛けると、
「ミナト先生」とカカシは小さく言ってこちらを向いた。その片手には白い紙箱と、プレゼントのようなりボンと色紙で包装されたものを持っている。いつかの自分の帰宅途中の姿を思い出して、誰かいい人との記念日なのかと邪推した。

「恋人にでも会いに行くの、それ」

「はは、ちがいますよ。今から病院です」

「病院って……」

あの子供か。

「実はあいつ、オレが拾った日が誕生日だったらしくて。今日遅ればせながらお祝いをしようってことになりましたね」

「拾った日って、十月十日？」

「はい。四歳になったんですって」

嬉しそうに語るカカシとは対照的に、ミナトの中ではどろりと溶けるような、しかし冷たくて黒いなか溢れ出していた。十月十日に四歳。その情報に、一度は鎮まった様子を見せた激情が、再度ミナトの脳を焼くように熱を持ちだす。

ふざけている。

「そう言えば、ナルト——あ、その子の名前なんですけど、ナルト、四代目のことが好きらしいんですよ。昨日会った時に四代目の絵を描いていました。よかったら、今度会ってやってくれませんか？きつと喜びます」

カカシは無邪気だった。子供を喜ばせようと一生懸命なただの大人だ。それはミナトがかつて憧れ、なろうとしてなれなかったもの。ナルトが生きていたならば、彼の誕生日にはいつもより早くケーキとプレゼントを持って二人が待つ家に帰って、息子の嬉しそうな顔を見ることが生きがいの、そんな存在。もう、一生なれはしない。そう思うと、ごぼりと、自分の中で何かが溢れた。

「……今から俺も病院に行くところだったんだ。よければ付き合うよ」

「本当ですか？ありがとうございます」

にこりと笑うと、自分を微塵も疑ってもいないカカシは返事をするよつに笑った。

病院の薬品の匂いはいつまで経っても慣れない。久しぶりに訪れた木の葉の病院は、前訪れた時となら変わっていなかった。久しぶり、と思つて、しばらく怪我や病気をしていないんだなあと感慨にふける。忍界大戦終結後は、木の葉はずいぶん平和になった。この頃は、火影である自分がやることは戦略等の指揮ではなく、木の

葉の内政関係の事務処理だ。ミナトたち世代が親となった今、その子供たちは戦争の“せ”の字も知らないで育ってくれている。それが嬉しく感じると同時に、フガクのところのちびすけが日々ほのぼのと成長していく様を見て、せつない気持ちになったことを思い出した。あれはナルトと同じ年だ。フガクの妻のミコトとクシナはとても仲がいいし、もしかしたらナルトといい友達になれたのかもしれない。

カカシは慣れた様子で病院内の廊下を進み、割と奥まったところにある病室を指差した。ここにその子供がいると言う。

病室の入り口に手書きで書かれた“うずまきナルト”のプレートが目に入る。いつの間にか乾いていた口の中に気付いて、緊張している自分に驚いた。

(忌々しい)

先ほど噛み切った唇を舐めて、血の不快な味を口の中に広げた。意味のない行動だったが、とにかく自分を落ち着けるために何かしたかった。

「ナルトー、来たぞー」

がらりと病室の扉を開けながら、カカシが中にいる子供に声を掛ける。それに応えて、子供特有の高い声が返ってきた。

「カカシにーちゃん！いらっしやいだってばよ！」

「お！一丁前な挨拶だ。誰に教わった？」

「んつとねー、看護婦のおばさん」

「へえ、そりゃよかったなー。いいこと教わったぞ」

カカシに続いて病室に入る。彼はベッドの周りを囲んでいるカーテンをめくりながら子供と会話していたが、同時にミナトを迎え入れるように身体を避ける。それに応えてカーテンの中に入ると、病院の白いベッドの上に、小さな体がちょこんと乗っていた。

金色の髪の毛に、青い瞳の子供。細い体や青つちろ白い身体に巻かれた包帯やカーゼが痛々しく見えた。子供は、いきなり現れたミナトをまじまじと見つめている。警戒されているのか、それとも単なる興味か。

金髪も予想できたし、青い目も予想できた。もしかしたらクシナのような赤い髪かとも思ったが、火影が目的ならば自分と容姿を合わせてくるだろうと思っていた。それだけなら、よかった。

「……………」

子供の両頬にある細い三本の痣。まるで動物の髭のようなそれは、確かミナトの記憶にある。小さな棺桶で眠っていたわが子の顔にも、同じ痣があった。

（どういうことだ。そこまで漏れていたと言うことか）

しかし、それはどうにも考え難い。ナルトの葬儀は行われなかったし、遺体はすぐに火葬された。火影の子供が死産だったことは、実は里にはあまり大っぴらには知られていない事実だ。あまり触れまわってはクシナの心を抉る結果になるかもしれないと、公表しな

かった。そのため、ナルトの外見的特徴を知り得たのはごく少数の人間だけで、全てが木の葉でもミナトの信頼を得ている者たちばかりである。そこから裏切り者が出たことは考えたくないし、何より裏切ったとして、我が子が生き返ったような“演出”に果たして利点はあるのか。

（いや……、俺は十分動揺させられている）

自嘲するように口端を上げて、ミナトは深く、細く息を吐いた。

今もそうだ。ミナトは、早鐘を打つ自分の鼓動を押さえられなかった。目の前の子供が、果たして忍の気配を少しでも匂わせていたら、そうではなかったのかもしれない。自分でも処理しきれないそれを、きつく拳を握りこんで抑えた。

なんだ、なんなんだ。

何でお前がここにいるんだ、ナルト――

ミナトは目に映るその子供を、なぜだか最愛の息子だとは思えなかった。

7（後書き）

原作で、生まれた直後のナルトにはもう髭の痣があったので、九尾が入っていないこちらのナルト（死んだ方です）にも痣がある設定を付けました。

お気に入り登録数50件突破！ありがとうございます！！

「ナルト、自己紹介して。四代目火影様だ」

「四代目……？」

カカシの言葉に、子供が不思議そうに首を傾げる。その視線は相変わらずミナトに注がれたままだ。まるで信じられないものでも見たかのような反応である。信じたくないのはこちらだというのに。

「四代目は死んだんじゃないの？」

「またお前はそんな……。すみません、ミナト先生。こいつ、記憶に混乱があるみたいで」

記憶に混乱、と聞いて演技かと思ったが、すぐにそれを振り払う。振り払ってから、演技かもしれない、と思考が返ってくる。混乱していた。子供を疑わなくてはいけないと思っている自分と、この子供がナルトであると、どうしてかどこか期待してしまっている自分がいる。

期待なんてする必要はない。ナルトは確かに死んだのだから、ここにいる子供がどれだけ我が子と似ていようが、その気配がナルトと近似していようが、ナルトではないのだ。

「……んー、うずまきナルトだってばよ！よろしくおねがいします」

子供は納得している様子はなかったが、カカシに促されるままに

自己紹介をした。ニツと笑った顔になぜか泣きそうになる。子供の声で直接伝えられたナルトの名前を、特別な響きなんてなにもないのに、思わず何度か頭の中で繰り返してしまった。繰り返したところで、どうなるわけでもないのは分かり切っているというのに。冷静さが戻ってこない頭のまま、声の震えを意識しないように口を開いた。

「……波風ミナト、四代目火影だ」

その声は妙に低くて、自分にしては嫌に無愛想な言葉だった。もっと愛想良くふるまうつもりだったが、それが限界だった。

子供は相変わらず不思議そうにこちらを見上げている。ふと、子供の後方、壁に貼られた絵に目が行った。そういえば力カシが、ミナトの絵を子供が描いていると言っていた。その一枚だろうか。肌色と金色の人らしき大きなものと、それを小さくしたようなものが並んで立っている絵が飾られていた。

それがまるで、親子のように見えた。

「……っ」

駄目だ、駄目だ駄目だ。

目頭が熱くなったのを感じて、自分の中に溢れた考えを振り払う。惑わされるな。この子供は違う。

違う——。

「ミナト先生？」

気付けば片手で顔を覆った格好で固まっていた。カカシの訝しげな声に顔を上げる。

「どうしました、お体の具合でも優れないんですか？」

「いや……」

軽く首を振って、もう一度子供を見た。相変わらずこちらを見つめている目は青い。空のそれより青く、海のそれより澄んでいる青が、こちらを見つめていた。息子は、ナルトの目はこんな色だったのだろうか。目の色も確認することが出来なかった小さな命を思い出して、また唇を噛んだ。痛みなど感じなかった。ただ、血の不快感が口の中を侵食するばかりだ。

これ以上、ここに居ればボロが出る。そのボロが何なのか自分自身でもわからなかったが、ここにはいられない。ミナトは早々に立ち去ることにした。その前にと、カカシに向かって小さく声をかける。

「カカシ、今夜火影室においで。大事な話がある」

「…はい。了解しました」

唐突な命令にカカシは一瞬当惑した様子で幾度か瞬きしたが、それでもすぐ何かを察して低い声で答えたのは彼らしい。

「それじゃあ、失礼するよ」

「はい…。ナルト、四代目様がお帰りになるそうだよ。さよなら言
って」

そう言うカカシは、いつの間にかずいぶん保護者然としてきている。それをよくもわからず不快に感じたのはなぜか。考えて、それが嫉妬に似ていると気付いてミナトは笑った。滑稽な感情だ。侵入者の可能性がある子供に対して抱く感情としては、論外のものだった。

「えっと、バイバイだつてばよ？」

言われるがままに手を振った子供に、ミナトはどんな顔を向けたのだろう。自分でもわからない。だけれど、ミナトが子供を見た瞬間、彼の顔が強張ったのを見た。途端、振っていた手を下ろして子供は俯く。ミナトの方を向いていたカカシはそれに気づかず、「ありがとうございました」と頭を下げている。

「いや、じゃあ夜に」

「はい」

言い残して、二人にさっさと背中を向けて足早に病室から出た。病院を出た所で瞬身を使い、人気のない里の外れの演習場まで来て、足を止める。気を落ち着けなければと思って、眉間を揉んでみた。ため息をついてみた。頬をひっぱたいてみた。

「……ナルト」

息子の名前を呟いてみた。先ほどの子供の顔が浮かんでくる。何度振り払っても浮かんできたその姿が、ミナトの苦悩を誘う。

あの子供は何者なのだろう。フガクの報告の通り、忍には見えなかった。だが、だとしたらあの子供は何だ？ナルトが順調に育ったならばきつとあんな姿をしていただろう。その姿をして、ナルトという名を名乗って、一体どんな目的があるのか。誰かの差し金か。もしかしてあの子供はなにも知らなくとも、何か秘密を握っているのか。

疑問は尽きなかった。その間にも頭には、先ほどの子供の顔が浮かんでくる。あの子は、最後に顔をこわばらせて俯いた。そんな顔をするなど、言ってやりたかった。だが、ミナトの理性がそれを許さない。あれは十中八九侵入者の正体だろう。だったら、今すぐにも拘束して里の監視下に置かなくてはいけない。上層部の過激派ならば処分することも考えるだろう。ミナトだって、実行に移さなくてもそれを視野に入れてあの子供に対する対応をしなくてはいけない。そうしなくてはいけないのに、ミナトはあの子供にそんなことができるとは、到底思えなかった。

あの子供に、他の反逆者と同じように手を下すことは出来ない。それは、どう考えてもミナト個人としての感情が邪魔をしている所為だ。そんなもの殺してしまえと念じても、人間である自分が感情を殺しきることは不可能に思えた。あの子供以外ならばいざ知らず、アレに対して、冷静でいられる気がしない。消えてくれない子供の顔を、もう一度確かめるように思い浮かべた。金色の髪も、頬の妙な痣も、死んだはずの我が子と一緒にだ。

「……ナルト、か……？」

呟いてみて、何とおかしな妄想だろうと自嘲した。そんなはずない。あの子は確かに死んだ。この手で冷たくなった身体を確認した。

だから、その可能性はゼロだ。先ほども似たようなことを考えて、否定したばかりじゃないか。

（俺は馬鹿者だな……）

ミナトは消えてくれない子供の顔を無理やりかき消すように、固く目をつぶって頭を抱えた。

8（後書き）

最後をちよつとだけ直しました。（11・8・1 13時）

10日ほど更新が難しくなりました。詳しくは活動報告で。

四代目火影と名乗る男が去っていった方を見ながら、ナルトはぎゅつと膝を抱き締めた。久しぶりの感覚は、懐かしい痛みを伴って胸を潰す。忘れていたはずのそれは、少し前、本当にほんの少し前までは常にかけていたことだ。

あの男が自分に向けていたのは、憎悪だった。ナルトは人の感情に敏感な子供に育っていたから、感じ取ったことに間違いはないはずだ。

ここで触れ合う人々が皆優しいからすっかり忘れていた。自分は、里人に嫌われているという事実を。

「ナルト」

とんと、頭に重いものが乗った。カカシの手だ。温かなぬくもりを持ったそれは、何度かナルトの頭を往復する。その度に、強張っていた身体が解けて行くような気がした。

「どうした？」

カカシの声がいつもより優しく耳に届く。見上げた銀髪は、蛍光灯に透けて光っていた。

「今日はケーキ買ってきたぞ。医者も食べていいってさ。あと、これね」

カカシは口を開かないナルトに気にした様子もなく笑いながら、持ってきたものを自慢げに披露した。白い紙箱と、包装紙に包まれ

た何か。白い紙箱はナルトだって見覚えがある。ケーキの箱だ。もう一つは、何だろう？

「プレゼントだよ。開けてみて」

カカシが視線で開けるように促してきたので、ビリビリと包装紙を破いて開けてみた。中から現れたのは、犬なのだろうか、変な顔のキャラクターの帽子だ。妙に挑戦的な顔をした丸鼻のキャラクターが、こつちを睨んでいる。こげ茶色のそれを被ってみたら、ナルトの頭には少し大きかった。

「ありゃあ、サイズ間違えたか」

失敗失敗、と悪びれた様子もなく、むしろ楽しそうに笑うカカシに、ナルトも楽しくなってニツと笑った。そうすれば、さっき感じた嫌な感覚が溶けて消えて行くような気がした。

「それ、ナイトキャップっていうらしいよ。寝るときに被るんだって」

「ないときゃつぶ？」

「要するにパジャマだよ」

パジャマにも帽子があるのか、と軽いカルチャーショックを受ける。でも、今日からはこれを被って寝ようと大きめの帽子を撫でる。

「ありがとುತ್ತてば、カカシにーちゃん」

「うん、どういたしまして」

＊

日が暮れ、夜の帳が降りた頃。カカシがミナトの命令通り火影室に向かうと、彼はいつも通り机に座って手を組んでいた。少しでも違うのは、今日は書類に向かっていないところか。ノック一つで入ってきたカカシを見止めると、ミナトはゆっくりと立ち上がった。

「御苦労さま。夜遅くに悪いね」

「いえ」

ミナトの様子が変だ、と一目で思った。そう思えること自体珍しい、というかあり得ないことだ。彼の様子が変だったのは四年ほど前、生まれたばかりの赤ん坊が死んだ時くらいだった。それ以外のミナトは常に冷静で、どんなことに対しても自分の感情を殺し最善の策を練り上げる、火影として理想的な人物である。その彼が、一体何に対して様子をおかしくしているのか。

ミナトは机を回ってカカシの前まで来ると、一枚の書類をこちらに示した。反射的に受け取ったそれは、警務部隊が、カカシが不在の間に行ったというナルトの事情聴取の報告書だ。これがミナトの

手元にあることは特に不思議なことではない。里のトップの火影に
対して、これくらいの情報はすぐに開示されるだろう。しかし、な
ぜこれを今手渡されるのか。

「うずまきナルトは、……里の監視下に、置く」

ミナトが小さく言った科白に、一瞬反応出来なかった。

「何で、ですか？」

すぐに理由を問うことが出来た自分を褒めてやりたい。それくら
い、ミナトの科白に驚いたのだ。

カカシの問いに、ミナトは苦しげに眉を顰めて答えた。

「十月十日の夜に、里に何者かが侵入した」

初めて耳にする情報だったが、一介の忍でしかない自分に与えら
れる情報が限定されていることは今更驚くことではない。カカシは、
ミナトの言葉に耳を傾けることに集中した。

「あの子は、十月十日に拾ったと言っていただろ？君があの子供を
見つけた場所と、侵入者が出現した場所が一致した」

「……ナルトが、この里を狙っている一派の手の者だともいい
いんですか？」

「否定は、できない」

そう言っているミナト自身、ナルトを疑っているようには見えな

い。半信半疑、と言ったところだろうか。カカシの目から見てもナルトはただの子供だ。ミナト自身、ナルトに会ってみてそう思ったはずである。そのため状況証拠が揃っていても、その疑いに陰りが出てきたのだろう。

「ナルトはただの子供ですよ」

カカシは念を押すように言った。ミナトはさらに眉間にしわを寄せると、大きく息を吐きながら腕を組む。

「そうは言ってもな……」

「何か気になることも？」

「……いや。とにかく、うずまきナルトには監視をつける。お前がやれ、カカシ」

ここに呼ばれた理由はそこか、と合点がいく。しかし、正直願ひ下げだ。

「オレに、ナルトに不審な様子がないか見ていると？」

「ああ。お前がやるのが、一番都合がいい。もし拒否するなら暗部をつける」

「……脅し、ですか」

「好きに受け取れ」

途端にミナトの火影としての冷徹さが表に出てくる。逆らうこと

など考えなくなってしまうような、強制的な声音だった。

ナルトが暗部に監視されるなんて、虫唾が走る。だったら力カシ自らが監視した方が幾らかマシというものだ。ミナトの脅しにまんまと乗る形になってしまいが、仕方がない。

「了解しました」

今は、腰を折っておいた方が得策だろう。

9（後書き）

しばらく更新できなくてすみませんでした。また一週間ほど更新が難しい状況が続いています。もう少々お待ちください。

おかしい、と波風クシナ、旧姓うずまきクシナは、目の前でクシナ手製のナスのぬか漬けをかじる夫、ミナトの顔を凝視しながら思った。自分もぬか漬けをかじって、「今年もうまく出来た」と舌鼓を打ちたいところだが、それどころではない。どうも夫の様子がおかしいのだ。見るからに元気がないと言うか、ぼんやりしていると
言うか。今も呆けているのか、何回噛んでいるの、と突っ込みたくなるくらい一口が長い。こんな妙な様子のミナトを、クシナは見たことがなかった。

変な言い方になるが、おかしく見えることがおかしいのだ。クシナの夫は火の国は木の葉隠れの里のトップ、火影だ。感情を隠すのが誰よりうまい。

どうやら自分を殺すのが癖であるらしく、妻である自分の前でもそれはあまり変わらない。ナルトが死んだときでさえ、クシナに気を遣ってか極力いつも通りに振舞っていた様子だった。里の多くの機密を抱える身としてそれは当然であるだろうが、クシナはもう少し気を緩めてもいいと思っている。直接苦言を呈したこともあったけれど、ミナトも無意識らしく首を傾げられた始末だ。

そのミナトが明らかに様子がおかしいなんて、おかしい。これは相当のことがあったに違いない。何があったのかと予想してみたが、もともと頭で考えるよりはまず行動に移すタイプだ。クシナは早々に白旗を上げて、直接聞いてみることにした。

「ミナト、あなた何かあったの？」

単刀直入な質問に、ミナトは驚いた風に見張って「え？」と短音を発した。これも彼らしくない。

「何かあったように見えるかな？」

困ったように笑うミナトに、クシナは苦笑を返した。

「見るからに」

「そっか……。ごめん、気をつける」

そういうことを言わせたいんじゃない。彼に見せつけるようにあからさまに眉をひそめて溜息をつく、クシナはテーブルに箸を置いた。それを見て同様に端を置いたミナトの目を、半ば睨みつけるようにまっすぐに見つめる。

「何があったの？」

言え、と言外に催促すると、ミナトは口を引き結んで黙り込んだ。悠に一分はそうやっていただろうか。やがて、ミナトはやっと口火を切った。

「ごめん、言えない」

結局そうなのかと落胆してしまったが、ミナトの事情も汲んでやらなくてはいけない。彼は火影なのだから。

「里のこと？」

「うん。心配掛けた？」

「そりゃあね。私の仕事はあなたを心配することだから、いつつも心配してるわ」

「はははっ、そうなの？」

「そうよー。お昼はちゃんと食べたか、とかね」

「そんなことまで？」

「大事なことよ」

そうやって笑い合って、クシナが箸を持ったのをきっかけにまた夕飯がスタートした。

今日はカレイの唐揚げに野菜の甘酢あんかけをかけたものと、冷ややっことナメコの味噌汁だ。我ながらよくできたぬか漬けたちも洒落た小鉢の中に鎮座している。ミナトは、クシナが作る料理をいつも美味しいと褒めてくれる。だけれど、時々作りながら切なくなる時があつた。

もしもナルトが生きていたら、きっとこういうものじゃなくて、子供が好きそうな柔らかくて食べやすいものを作っていたのだろうな、と夢想する時がある。だからこそ、一年に一度、もう習慣になつている息子の誕生日の日には、その夢想の中で思いついたものをお願いただけ作る。そして、仏壇の前にそれらを置いて、ナルトに天国でその料理たちを食べてほしいと祈るのだ。

クシナは、ずっと自分を責めていた。自分が九尾の人柱力でさえなければ、ただの普通の女で、普通のくの一でしかなかったならば、

ナルトは無事に産まれて今も元気に生きていたはずだ、と。この九尾の所為で次の子供の夢も断たれた。それが決まった時、ミナトに離婚を迫ったこともあったな、と思い出す。そういえば、あの時の彼は珍しく激昂していて、「そんなことするものか」と怒鳴られた。あれは素直に嬉しかった。こんな自分でもいいのだと、必要だと言ってくれて、嬉しかった。

「……ねえ、クシナ」

「ん？」

最後の一つだったナスのぬか漬けに箸を向けたときに掛けられた声に、食べたかったのだろうかと首を傾げる。しかし顔を上げて見たミナトは、クシナにある意味予想外なことを言ってきた。

「もしナルトが生きていたら、どうする？」

「……………え？」

たっぷり間をおいた反応は間抜けなものだった。ミナトの意図がわからない。今その質問をするなんて、どうしたのだろう。

いや、今だからこそするのだろうか。もうナルトが死んでから四年になる。その今だからこそ、もし子供が生きていたとしたらという仮定で、何か話したくなるのかもしれない。そうやって、少しだけ幸せな考えを共有したくなるのかもしれない。クシナだって、口に出してはいないが先ほどまで“ナルトが生きていたら”こんな料理を作るだろう、と考えていたじゃないか。

ミナトが、珍しくクシナに弱みを見せてくれたことになるのだろ

うか。そう思うと妙に嬉しくて、小さく笑って「そうだなあ」と考えた。とりあえず、先ほと思ったことを口にする。

「まずね、食事はこういう和風で大人好みのじゃなくて、子供が好きそうなのを作るかな」

「うん」

「それから、あなたに構ってあげられる時間が今の十分の一ぐらいになるわ。きつと」

ふざけた口調でそう言うと、ミナトは「ええ？」と驚きながらも笑っていた。そこには、さっきまでの妙に暗い様子はない。それに人知れず安堵して、「ミナトは？」と聞き返してみた。純粹に気になるところではある。彼ならば、ナルトが生きていたらどうするか。

「俺は……」

「うん？」

「……そうだな。どうするのかな」

齒切れの悪い言い方だった。さらに促すように彼を見つめていると、彼は何かを噛み締めるように口を引き結んだ。

「今ナルトがここに居たら、俺はどうするのかな」

それを自分に対する問いかけだと受け取って、クシナは答える。

「たぶん、他のお父さんたちと変わらないんじゃないかしら？」

「そうかな……」

「そうよ。最初は子供とどう接していいかわからなくて、そのうちめちやくちゃかわいく思えっちゃって、最後に一人立ちされて寂しがるのよ」

「そんなもの？」

「そんなもの」

クシナのナスのぬか漬けを齧りながらの科白は、ミナトには少し腑に落ちないものだったらしい。納得がいつていないようで首をひねっている。それでもクシナはそう思うのだ。

母親にとっては腹を痛めて産んだ子供。大切だと、愛おしいと思うのは当然だ。逆に、父親にとってはいきなり現れた自分の子供。最初はどうやって子供と接していけばいいのかわからないのが普通だろう。そうしてゆつくりと親になっていく。小さな赤子を抱いて戸惑いながらも、それでも愛おしい我が子を前に顔がほころぶ。そんな父親の姿を、ミナトの姿を見たかったと、いまさらながらに思った。

「…俺、どうすればよかったのかな」

「何が？」

「うつん、なんでも」

この話は終わりだとばかりに声を弾ませたミナトは、カレイに箸を付けて「美味しい」と笑った。

次の日は秋だと言うのにひどく暑い日だった。ミナトが起きるなり「暑い」と呻く程度には不快な気温だったが、同時によく晴れた日だ。洗濯物がよく乾くだろう。

長袖なんて着ていられずタンクトップでいたら、忍服を着込んだミナトに「いいなあ」と羨ましがられた。一見涼しげに笑っているが、彼の額には汗が浮かんでいる。

さすがに羽織を着るのは嫌だったらしく、玄関に立ったミナトは白い羽織を小脇に抱えていた。額当ても首に提げられている。火影がそれでいいのかと突っ込みたくなったが、「火影室に着くまでにはちゃんとする」と明言されてしまえば文句も言えない。

「行つてきます」

「はい、行つてらっしゃい」

出て行く彼を見送ってから、いつものルーティンワークをこなす。まずは朝食の食器を片づけて、次に洗濯物を干す。今日はすこぶる天気がいいからシーツも洗って干した。物干しに並んだ洗濯物は、見ようによっては壮観な光景だ。

それに満足してから、軽く家の中を掃除して、そこで午前の半分以上が終ってしまう。しかしお昼までにはまだ時間があった。

消耗品をそろそろ買い足さなければいけないことを思い出して、クシナは買い物に出ることにした。ついでにお昼ご飯は外で済ましてしまおう。

そう思って出た外で出会った銀髪を、クシナは思わず捕まえた。全速力で追いかけた所為か逃げられかけたが、なんとか彼を手中に収める。

「カカシくん、聞きたいことがあるんだけど」

そう言った時のカカシの顔は、予想外に愉快だった。

10（後書き）

カカシとクシナの港に対する認識は一緒です。あと、親の観念については私の私見ですので、異論などあるかもしれませんがご指摘はご遠慮いただけるとありがたいです。

なんだかんだ言って投稿です。思ったよりもパソコンに触れていますが、全力で投稿できるようになるのは14日以降になります。

お気に入り登録100件突破しました！！本当にありがとうございます！
ます！

火影としてのミナトを理解しているつもりでも、個人的な感情として気になるものは気になる。昨日のミナトの尋常でないその態度の中に、何かあるのか気になるのだ。彼が何か苦しみを抱えているのだとしたら、それを少しでも理解してやりたい。彼のすべてを知ることができなくても、妻として、彼の苦しみに一緒に向き合っていくことはできるはずだ。

里を歩いていた力カシを見つけたのは、そんなことを考えていた時だった。これは好機とばかりに里内でも珍しい銀髪を思わず追いかけて、捕まえて、今は里の並木道にあるベンチに彼を腰かけさせている。力カシを座らせたのは、長身の彼を見下ろすためだ。クシナは力カシの目の前に仁王立ちして、彼を見下ろした。

「ごめんつてばね、急に引き留めて」

「はあ……」

反省はそれほどしていないため上滑りする謝辞を口にとすると、力カシもそれを感じ取ったらしく微妙な反応が返ってきた。内心では心のこもっていない謝辞に失礼とは思いながらも、相手にそれを読まれるとムツとするのはなぜだろう。身勝手にもむかつ腹を立てたクシナは、目の前の銀髪をぐりぐりと撫でまわした。

「ちよつ、クシナさん!？」

いきなり髪を混ぜっ返されて慌てた声を上げた力カシに満足して、

彼の隣に腰を下ろす。カカシからしたらクシナの行動は拳動不審にしか見えないようで、乱れた髪を撫でつけている彼に訝しげな視線を向けられた。

「それで、聞きたいことって何ですか？」

視線に込められた不審な感情がそのまま乗った声で聞かれた。それにカカシを引きとめたそもその目的を思い出し、彼の方に身体ごと振り向く。まどろっこしい真似は嫌いだし苦手だ。今回もいらない詮索や駆け引きなんて捨てて、知りたいことを直球で聞くことにした。

「ミナトのことなんだけど、最近、あの人になにか変わったことあった？」

その質問に、実は収穫を求めていたわけではない。クシナの中でカカシは第一犠牲者だった。彼を皮切りに、ミナトに近い人物に最近の夫の様子がどんなものだったのかを聞いて回るつもりだった。その中で、ミナトの妙な様子に関するヒントが得られればいいと、それくらいに考えていた。

だから、カカシがクシナの問いに神妙な顔で考え込んだのを見て、「おや？」と思った。もしかしたら、一人目からかなりいい収穫が得られるかもしれない。

「ミナト先生、どうかしたんですか？」

しかし、彼はクシナが期待した答えをすぐにくれる気はないようだった。こちらに向き直り、そんなことを聞いて来る。

「私がそう聞いてるんだけどな」

「すみません……。でも、仕事のことを家に持ち帰る人には見えないので」

それに関してはクシナも同感だ。ミナトはそういう人だ。だからこそ、昨日の様子はおかしかったのだ。

カカシに昨日のことをできるだけ詳しく話して聞かせると、彼は顎に手を添えて考えるそぶりを見せた。それに期待を寄せてその口から発せられる答えを待っていれば、カカシは唐突に立ち上がる。その動きに着いていけず、クシナは一人腰掛けたまま彼の背中に声を掛けた。

「カカシくん？」

「ミナト先生は、クシナさんに何も言わなかったんですね？」

「そうよ？どうしたの、カカシくん」

何を考えているのか、見上げる背中からは読み取れない。そもそも、クシナは感情を読み取ることはあまり得意ではない。しかしどこか不穏な空気だけは、その背中から感じ取ることができた。昨日のミナトのことを聞いて、一体カカシは何を思ったのだろうか。

「奥方様」

「え！？な、なに？」

呼ばれ慣れない呼び名で突然呼ばれて驚いてしまった。こちらを

振り向いたカカシは、静かな瞳でこちらを見下ろしている。ますますもって彼の意図がわからなくて、クシナは困惑を隠せずに眉を寄せた。

「これはオレ個人の判断ですので、他言なきよう、お約束できますか？」

「何？急に……」

「お願いします」

妙に気迫のこもったカカシの様子に、クシナは戸惑いながらも頷く他ない。それに頷き返したカカシは、クシナに立ちあがるよう促し、ゆっくりと歩き出した。付いて来るように指示される。

最近の若い子の考えることはよくわからない。半ば逃避気味の結論を内心に出して、クシナはカカシに着いて行くことにした。

やがて促されるままにカカシの背中を追って辿り着いたのは、木の葉の病院だった。ここに、昨日のミナトのおかしな様子を説明できるようなヒントがあるのだろうか。あれから一言も話そうとしないカカシには妙に話し掛けづらくて、クシナはなぜ自分をここに連れてきたのか聞けずにいた。困惑している間にもカカシはずんずんと進んでいくし、よくわからずとも従うしかない。彼に着いていけば、何かわかるのかもしれないのならば。

カカシが向かったのは病室が密集している棟だった。忍として前線に出なくなっただけからは、久しく訪れていなかった場所だ。しばらく来なくともその雰囲気は大した違いはなく、クシナの胸中に懐かしい想いが溢れた。

「ここです」

やっとカカシが口を開いた。その声に意識を彼に戻すと、ガラリとある病室の一つがカカシの手によって開けられたところだった。気付けばカカシの距離が思ったよりも空いている。慌てて駆け寄って、彼が入って行った病室に身を滑り込ませた。

そこは小さな病室だった。ベッドは二つあったが、使われているのは一つだけのようだ。使用中だと思われるベッドのカーテンを、カカシはゆっくりと開く。

「ナルト」

カカシの声が紡いだ名前に、一瞬耳を疑う。自分の中で特別なものとなっている名前だ。過敏に反応しすぎていると自嘲したが、すぐにそれすらも忘れてしまった。

カカシが向かったベッドには、小さな子供が寝ていた。金色の髪の毛の小さな男の子。まろやかな頬には特徴的な髭のような痣があり、白い肌の中で異彩を放っている。病院で支給される寝間着に隠れた細い手足には、包帯やガーゼが当てられていて痛々しく見えた。しかし、その眠りは穏やかなのか、子供は穏やかな顔で規則的に胸を上下させている。

クシナはその子から目を離すことができなかった。その子が寝がえりを打ち、むず痒そうに目を擦る。そうすると、ともすれば間抜けとも表現できそうな寝顔が、こちらを向いた。よく見れば涎が垂れている。

「ナルト…」

自然に口から漏れ出た我が子の名前。ベッドに歩み寄り、屈んでその顔を覗き込んだ。恐る恐る手を伸ばし金色の髪の毛を梳き、そのまま子供らしいふつくらとした頬を撫でる。自分の薄い皮膚越しに、確かな温もりが伝わってきた。

何とも言えない感情が胸を締め付ける。あり得ない想像が頭を巡り、しかしすぐにそれは否定した。それでも溢れるこの気持ちは、否定することができない。

「クシナさん、ナルトを知ってるんですか？」

驚きを含んだカカシの声に彼を振り向く。どうしてか彼の存在を一瞬忘れていた。仰ぎ見た彼の当惑した顔を目の当たりにして、クシナは苦笑を返す。

「この子、ナルトって名前なの？」

「はい」

「そう…。実はね、ナルトって、私たちの子供の名前なの」

初めて知る事実だったのだろう。カカシが息を呑んだ。それに笑いかけて、子供——ナルトの髪の毛を優しく撫でる。そのように触れていても、ナルトは起きる気配がない。よほど深く寝入っているらしい。

「この子はそっくりだわ、あの子に」

生まれたばかりのナルトを抱いたことを思い出す。泣くこともなく、目を開けることもなく、死んでしまった愛おしい我が子。金色の髪の毛で、顔に不思議な痣があったことは忘れることはない。一生胸に仕舞っておくはずだった愛し子とそっくりな子供が、目の前に現れた。

普通は驚くだろうに、クシナは困惑していない自分が不思議だった。もつと動揺してもいいはずなのに。ただ愛しいと思えてしまっ
て、行き場をなくしてしまった母性らしきものが、自分の中で急に膨らんでいくのを感じた。

この子はいったい誰なのだろう。クシナをこんな気持ちにさせるこの子は、誰なのだろう。

「ク…、奥方様、すみません」

カカシの小声が近くに聞こえて彼を見ると、眉間にしわを寄せた彼の顔に出会った。

「たぶんこのナルトが、四代目様の妙な様子の原因だと思われます」

「え？」

では、ミナトはこの子に会ったということだろうか。だったら言うてくれればいいのに、と思って、クシナを傷つけないと考えたのかもしれないと考え直す。誰もが、死んだはずの子供に会ってこうして尋常でいられるとは限らないのだから。

「あの人は、なんて？」

ミナトの昨日の様子から察するに、受け入れることは難しかったのかもしれない。それも仕方ない話だ。クシナだってすんなり受け入れられたのが不思議なくらいなのだから。

クシナの質問に、カカシはさらに眉間にしわを寄せた。しばらく黙りこんでしまったカカシの様子に首を傾げると、意を決するよう
に彼は口を開いた。

「四代目様は、ナルトを里の侵入者ではないかと、疑われております。ナルトは、身元が判明しなかったものですから」

「……………」

「すみません、まさかそのような事情があるとも知らず」

（…侵入者？）

沈んだ様子のカカシを置いて、ナルトの方へと視線をやった。この子が侵入者？そんなことあるはずないじゃないか。こんな無垢な顔をして寝ているこの子は、ただの子供にしか見えない。ミナトは、どういう見でそう判断したのだろう。

「カカシくんは、どう思うの？」

「……そんなことは、絶対になんと思っています」

確認のために聞くと、期待通りの答えが返ってきた。クシナもそれに頷き返す。

「ん……………」

ナルトが難しい顔をして寝がえりを打って、また目を擦った。そして薄く開かれた目がクシナを捉え、途端に見開かれる。後方に力カシを見つけて、起き上がったナルトは彼に縋るように近寄った。初めて会う顔に緊張したのだろうか。そのナルトの行動に、ちょっと傷ついている自分がいることに気付いた。

「大丈夫だよ、ナルト。この方は優しい方だから」

力カシが言っても、ナルトは警戒を解こうとしない。彼の大きな身体に隠れるようにしてこちらを見つめている子供の瞳は、空を思わせる澄んだ青だ。ミナトと同じ色だ、と思ったら、さらに嬉しくなってしまった。

クシナは、なるべく警戒されないようにナルトに視線を合わせて、自分の中で最上の笑顔をその顔に浮かべた。

「はじめまして、ナルト」

「……はじめまして、だってばよ」

初めて耳にしたナルトの声は、高くて子供らしい響きだった。偶然か、クシナの口癖と似たようなものまで聞くことができた。

「よろしくね!」

思わず語尾を弾ませたら、ナルトが少し警戒を解いたように見えて、クシナはホッと胸を撫で下ろした。

カカシがクシナにナルトのことを話したのは、ミナトに対する小さな反発心からだった。ナルトを監視するなんて命令、はつきり言っただけでもない。それでも従うしかない一介の忍であるカカシが、思わず取った行動だった。自分のことながら、若さゆえに判断がよくできなかったのかもしれない。それに、奥方様になれば多少のことがばれても、口の堅い彼女のことだ。きっと大丈夫と思ったのもある。

カカシの隣で、目を覚ましたナルトと一緒に楽しそうに絵を描いているクシナを見て、カカシは複雑な気持ちを吐き出すようにため息を吐いた。

ナルトは、ミナトとクシナの間にできた死んだ赤ん坊と名が一緒に、容姿までよく似ているらしい。カカシはそれに少なからず衝撃を受けた。そういえば“うずまき”という姓も、クシナのかつての姓だ。だとするならば、昨日ミナトがナルトに会った時の妙な反応も頷ける。その夜もおかしな様子だったし、ナルトに会ったことで動揺していたのだろうか。

（さすがの火影も、動揺せざるを得ない、ってことか）

そう考えて、もう一度クシナに視線をやる。彼女はどんなのだろう。目の前に死んだはずの我が子と瓜二つの子供が現れたのなら、ミナトの反応の方が正常であるように感じる。彼のように動揺して当然だ。しかし、クシナは動揺するようなど見せず、むしろ笑っていた。その笑顔があまりにきれいで、最初にナルトを目にした彼女

の様子に、カカシも思わず目が奪われた。

愛おしそうに眠っているナルトの髪を撫でるその顔は、カカシの記憶の中には終ぞ出てこない表情である。母の愛情を知らず育った自分には懐かしさも感じられないが、あの顔がきつと“母親”なのだろう。

「えーっと、クシナねーちゃん？」

「きゃーっ！姉ちゃん！？そんなに若く見える？」

深く考え込んでいたカカシの耳に唐突に飛び込んできた高い声に、呆気にとられてそちらを見る。クシナが頬に手を当てて真っ赤になっていた。照れているというか、むしろ喜びが爆発していると言った感じが。彼女と顔を合わせる機会は今まで多くないが、こんなに明るい顔は久しぶりに見る。

「ナルト、私のことはおばちゃんでもいいよ。私、あんたと同じ年の子供がいたんだから」

「そーなの？でも、おばちゃんには見えないってばよ」

「もー！うまいな、この子は！」

ナルトがもう少し大きければ、その背中をバンバン叩くのが目に浮かぶようだ。実際、代わりとばかりにカカシはクシナに背中を強かに打たれた。遠慮の感じられないその力は強い。なかなか痛かった。赤くなっていなければいいが。

「クシナさん……」

非難の視線を向けたが、どうやらそれはクシナに届かなかったらしい。上機嫌でナルトを撫でまわす彼女の視界にさえ、カカシは入っていないようだ。

カカシは先ほどとは違う意味合いを乗せたため息を吐いて、とりあえず諸々のことを考えるのをやめた。今はただ、ナルトとクシナの平和な掛けあいを見ていた方が精神衛生上言い気がする。

あれからしばらくナルトと話していたクシナは、また何度か来る約束を取り付けたらしい。カカシと並んで病院を出た後の彼女は終始ご機嫌だ。鼻歌まで聞こえてきそうな雰囲気である。今なら訊けるだろうか。カカシは、好奇心に勝てず隣を歩く彼女に声をかけた。

「クシナさん」

「なに？」

「驚かないんですか、ナルトのこと」

「驚いたわよー」

あっけらかんとした口調に、カカシは少々虚を衝かれた。変わらず楽しそうな彼女は、不思議な色をした瞳を細めて語りだす。

「でも不思議よね。あの子のこと、何でこんな自然に受け入れられたのかしら」

驚くほどに長い赤い髪が揺れて、秋なのに強い日の光に透けて虹のように光る。ずっと姉のように思えていた彼女が、不思議と違う女性のように見えた。

「あの子が“ナルト”なわけないのにね」

確信の籠った硬い声が、やけに耳に響く。カカシはふと、病院のほうを振り仰いだ。

ただの子供だと思っていた。しかし、ナルトが彼女とミナトの子供とそっくりで、名前まで同じ子供。偶然と素直に納得するには出来過ぎている気がする。

ますます、わからなくなってきた。ナルトが何者か。侵入者だなんて、信じたくもない。だが、しかし――

「カカシくん？」

クシナの声に振り向く。カカシは曖昧に笑って、自分の中に生じた動揺を悟られないように小さく眉を顰めた。

12（後書き）

一話一話長さがまちまちですみません；

赤い髪の女の人が初めてナルトの病室を訪れてからここ何日か、その人は毎日のようにナルトの前に現れた。その人が病院を訪れてすることは、ナルトとたわいない話をする事だったり、ナルトのリハビリに付き合うことだったり。散歩に一緒に行くこともあった。いつもやることは少しずつ違うけど、彼女はいつも楽しそうに笑っているのが印象的だった。

「やつほ、ナルト」

そして今日も、腕のリハビリを終えたナルトの元にその人は現れる。クシナと言う名前のその人は、長い長い赤い髪の綺麗な人で、ナルトはその人に会うたびに妙に緊張して、気恥ずかしい思いをしていた。今日も見ることが出来た彼女のキラキラした笑顔に、ナルトはどう反応していいかわからなくてもごもごと口をまごつかせる。

そんなナルトを知ってか知らずか、クシナは病室に入るなりうきうきとした様子で手持ちの鞆を漁り出した。

「今日のお土産は、リンゴだってばね！」

そう言っただけでクシナの白い手が掲げたのは、真っ赤に熟れたリンゴだった。彼女の髪の色と同じ赤のリンゴは、それだけでなんだかとても魅力的に見える。鼻に届く甘酸っぱい匂いもナルトの興味をそそった。

「ナルトのほっぺと同じ色だあ」

キシシと笑いながらクシナはそのリンゴをナルトの鼻先に差し出す。咄嗟に受け取ったそれはナルトの両手にも大きく感じた。でも自分の頬の色よりはクシナの髪の色の方がこの色に近いし、そっちの方が綺麗な気がするのに。

「おばちゃんの方が赤くてきれいだってばよ」

自分の頬と比べての意見にクシナは一瞬キョトンと顔を呆けさせたが、すぐににつこりと満点の笑顔を浮かべた。

「あんたは本当にうまいねー！」

ここに来た時よりもさらに機嫌が上向きになったらしいクシナは、ナルトの手にあったリンゴを取り、持参した果物ナイフで鮮やかに剥き始めた。あっという間にウサギを象ったリンゴが完成して、ナルトは目を輝かす。

「すげー！」

「どうだ！」

手に取った見事なウサギリンゴは可愛らしくて、食べるのがもったいなかった。だが、傍でクシナが何のためらいもなく頭から口に運んでいるのを見て、ナルトも同じようにウサギリンゴを頭からかじる。蜜がたくさん詰まったりリンゴは甘くておいしかった。

「おいしい？」

「うまいってばよー！」

あつという間に一切れ食べきって、二切れ目に手を伸ばす。二匹目のウサギリングもおいしかった。クシナは最初の一切れを食べたきりリングを食べる気配はなく、ナルトが懸命に食べている様子を見守っている。見られていると少々食べにくい。

「あんま見ないでっば」

「あ、ごめん。見てたかな？」

照れくさいのか顔を赤くしたクシナは、ナルトから視線を逸らし、手提げの鞆から裁縫道具らしきものを取り出しそれを弄り出した。少し前にも同じものを病室に持ち込んでいたことを思い出す。ナルトが、それが何なのか聞いてみると「火影の羽織よ」とクシナは大きな布をバサリと広げた。ナルトには読めなかったが、その布には漢字の刺繍が途中まで施されている。

「火影って、三代目のジツチャン？」

「うっん、三代目様じゃなくてね、四代目よ」

四代目という言葉に、少し前にここを訪れた金髪の大人を思い出す。四代目火影を名乗っていたが、ナルトの記憶では四代目は九尾襲来の折に死んでいる。確かに見た目は写真で見た四代目火影によく似ていたが、結局あれが誰なのか、ナルトの中で明確な答えが出ていなかった。何より、あの人はナルトが嫌いみたいだったから、考えること自体嫌で考えないようにしていたので、答えを出しようもないのだけだ。

確か力カシも彼のことを四代目火影と呼んでいたし、もしかした

らあの人が四代目火影であることは事実なのかもしれない。だとしたら、三代目のジツチャンや里の人々が自分に嘘をついてきたことになる。それを思っ、やはり自分は里人に嫌われているのだと肩を落とした。三代目のジツチャンまで嘘をついていたなんて、信じたくはないが。

クシナは、広げた布を畳んでまた針を構えて刺繍を再開していた。

「四代目の火影はね、私の夫なの」

「おっと？」

「旦那様ってこと」

「あの人、おばちゃんとふーふなんだってば？」

「そうよ」

金髪の大人とクシナを頭の中で並べてみた。悔しいがお似合いに見える。優しいクシナと自分を嫌っていると思われるあの人が夫婦だと思っ、なぜだか複雑だ。

そういえば、何でクシナはナルトにこんなに優しいのだろう。カシもそうだ。なぜ、自分にこんなに優しいんだろう。里人に嫌われている自分に優しくなんてしたら、彼らも目をつけられてしまうかもしれないのに。

「……おばちゃん」

「ん？何、ナルト」

クシナは、刺繍を進める手元から顔を上げて、ナルトに笑いかけ
てくれる。こんな風に笑ってくれるのはなぜなのか気になって、ナ
ルトは思い切って聞いてみた。

「おばちゃんは、なんでオレに優しいんだってば？」

クシナの目が見開かれる。その瞳は次の瞬間には僅かに伏せられ
て、すぐに微笑を作った。手元の裁縫道具をベッドサイドに置いた
彼女は、おもむろにナルトに手を伸ばすと、その両脇に手を差し込
んで抱きあげた。驚いたナルトが気付いた時には、小さい自覚があ
る自分の体はクシナの膝の上に乗っている。ぎゅっと、彼女の腕が
腹の辺りに回されていた。

「私には、あんたと同じ年の子供が居たんだ」

「うん、前に言ってたってばよ」

「実は、その子はね、私のお腹から出た直後に死んじゃったの。…
…私はね、ナルト。きつとあの子が、あんたを連れてきたんだと思
ってる」

クシナの言っていることの意味がよくわからない。「わかんねー」
と口にしたら、「それでいい」とクシナはナルトの頭を撫でた。

「ナルト、あんたはあの子によく似てるよ」

「おばちゃんの子供に？」

おばちゃんの子供ということは、あの人の子供でもある。四代目

火影と偶然目の色も髪の色も同じ自分は、もしかしたら死んでしまったと言っその子に似ているのかも。

「そうよ。だから……おばちゃんに、あんたのお母さん代わりをやらせてもらえないかな」

びっくりした。びっくりして眼玉が飛び出るかと思った。思わず振り仰いだクシナの顔は、いつもの楽しそうなものとちょっと違って、ほんわか温かくなるような笑顔で、見慣れない表情にドキドキした。

（おばちゃんが、母ちゃん？）

想像してみても、それはとても素敵なことのように思えた。優しい彼女が自分の母になってくれる。今まで想像上の登場人物でしかなかった“母”という存在が、急に確かなものになっていく気がしてこみ上げる思いにナルトは嬉しくなった。けれど、でも、自分は里の嫌われ者だ。そんなナルトの母になって、クシナがいい気分で見られるはずがない。きっと良くないことが起きる。そう、確信にも近い思いがあつた。

「おばちゃんは、おばちゃんだってだよ」

だから、そう言った。

クシナの顔を見ないようにして言ったその言葉に、彼女は「そっか……」と小さく返したただだった。

13（後書き）

しばらく更新できなくてすみませんでした。ちょっとあげるか悩んでいたの…。推敲不足が否めません……；

雨が降っていた。それはまるで、ミナトの陰鬱な気分を表しているように思える。まさか自分の気分だけで天気が変わるなんて、そんなことはあるはずないが。少なくとも沈んだ気分を増長する効果はあった。

この冷たい秋雨に打たれながら帰路を辿る。自宅に帰れば、いつもと同じようにクシナがこちらに笑いかけてくれるはず。そう思っ
て到着した家の中に「ただいま」と声を掛けたが、いつもは返ってくるはずの声がなかった。もう一度繰り返してみても、結果は同じ。静かな屋内が不気味で、雨に冷えた廊下が空寒く、その雰囲気にな不安に駆られたミナトは急いだ動作で中に踏み込んだ。

しかし仏間であっさりとクシナを見つけて、ほっと息を吐く。仏壇で細い煙が線香から焚き上がっているのが確認できたが、それはもうそろそろ燃え尽きそうである。彼女は、一体どこでこの格好でいたのだろうか。

なんとなく、声を掛けることは憚られた。ゆっくりと気配を教えるように意識して仏間に踏み込めば、忍であるクシナはこちらに氣付いてくれるだろう。そう思い足を進めると、赤い髪がざらりと揺れて、彼女はミナトの方へ顔を向けた。もしかしたら泣いているのかもしれないと思った妻は、むしろどこかすっきりとした顔で小さく笑った。

「おかえりなさい、ミナト」

「うん、ただいま」

いつもは玄関で交わされる会話をなぞってからクシナの横に腰を下ろし、ミナトも仏壇に向かって手を合わせた。

もうナルトの命日から数えてどれほど経つだろうか。十月も終りを迎えようとしていて、日々季節は秋から冬へと向かっている。今日の雨も、冬の予兆を感じる冷たさを伴っていた。

ナルトを失ったあの年。その年は雪が多く降った。白く閉ざされていく里を見て、その頃の自分は果たして何を考えただろうか。記憶を探ってみたが、思い出すのは難しかった。

「どうしたの、何かあった？」

前に彼女に聞かれたこととはほぼ同じことを聞くと、クシナは首を振った。

「何でもないわ。ご飯、今用意するから」

返ってきた返事は素っ気ないもので、ミナトを置いてクシナは仏間から出て行く。その背中を見送ってから、線香の煙へと視線を戻した。風の入らないこの部屋で、しかし僅かな空気の流れに揺られてたなびく煙を見つめながら、ミナトはまた大きく息を吐く。

あの子供についての処分が決定しそうだった。とりあえず監視下には置いて処遇については保留しておいたが、あの子供をそのまま野放しにしておくわけにはいかない。三代目や長老、暗部のダンゾウを含めた会議であの子供について話し合いが交わされ、案の定と言えいいのか、あの子供は拘束して里の管理下に置くことになった。あの小さな子供を、犯罪者として扱うことが決定したのである。

最後まで粘ったのは三代目だった。子供をそのように扱うことに
関して、ひどく嫌悪感を抱いているようだった。それに、あの子供
がミナトたちの子供と瓜二つだと言うことはその場の全員が知って
いたことだが、三代目は特にそれを気にしていた。そのようなこと
から子供に対する処遇を検討し直せとしつこく食い下がっていたが、
結局は多数の意見に押された形になって主張を下ろしてしまったの
だ。

（俺はどうするべきだった？）

自問するように、会議での自分を思い出す。ミナトは、その決定
に対して「問題ない」と言っただけ、それ以外は特に発言をしな
かった。

自分は里のトップである。もしミナトが強硬な姿勢で「あの子供
はこちらで保護する」、などと主張すれば、通らないこともなかつ
たはずだ。しかし、それをしなかった。する必要はないと、判断し
たからだ。あの子供が侵入者の可能性は高い。そうでなくとも、不
穏分子には違いない。ならば里の安全を考えた方策を取ることが一
番なのだ。

そうだとわかっているのに、未だに迷いが胸に渦巻く。ナルトに
あの子供が似ているからなんだと言うのだ、と吐き捨てるように考
えても、どうしても割り切れない自分が居た。

（一体あの子供は何なんだ）

あの子供を送ってきたどこかの組織の策で、あのような姿と名を
しているのか、もしくは考えられないが、偶然か。詳しく調べなけ

れば分かるはずもない。とにかくそれは、あの子供を拘束してからだ。

近いうちに、カカシにこのことを言わなくてはいけない。あの青年がどんな顔をするのか、想像したくもなかった。監視の任務を言い渡したときでさえ、親の仇を見るような目で見られたのだ。拘束とまでなったら、果たしてどんな恨めしい目で見られるのか。しかし、それを甘んじて受けるのが、里の泥を被る立場としての義務だ。

「ミナトー、ご飯出来たよー」

「ああ！今行く」

台所からのクシナの呼びかけに返事をして、音を立てないように立ち上がる。ふと仏壇に目をやると、燃え尽きた線香はまだわずかに煙を吐き出していた。

翌々日、日が頂点に達する時間帯、ミナトは木の葉病院に向かっていた。何のことはない、特に意味はないが、あの子供に一回会っておこうと思ったのだ。直接言葉を交わすつもりはなく、ただ、もう一度見てみたかった。ただそれだけだ。

明日には子供の処遇の最終決定が下ることになっている。こんな日の下であの子供を見ることが、もしかしたら今日が最後になるかもしれない。そう思うと、見ておきたかった。

似ているだけだと考えようとしても、そうやって結局はそう思いきれていない自分に自嘲の笑みが零れた。どうせそうなら、今日は火影としてのしがらみやあの子供が何者かという疑問は捨ててしまおう。ただ、ナルトが成長した姿を、あの子供から夢想すればいい。最初からこんな気持ちであの子供に向き合えば、恐がられる事もなかったのだろうか。

やがて到着した木の葉病院の奥まで進み、記憶にあるあの子供の病室を覗き込んだ。よく考えれば、窓から伺った方が周りに怪しまれない。失敗したな。

そう思いつつも見た病室は、予想に反して誰もいなかった。拍子抜けして中に踏み込むと、直後に看護師が病室の前を通りがかったので、彼女に「この病室の患者は？」と尋ねた。火影に突然話しかけられて看護師は当惑した様子だったが、それでもしっかりと口調で答えてくれた。

「ナルトくんなら、今中庭にいますよ」

そう言っ指差された方角は、病院の二つの棟を繋ぐ渡り廊下がある方向だ。そう言えばあそこには中庭があった。看護師に礼を言っつて、そちらへと歩き出す。

ナルトが中庭にいると言うことは、カカシもいるのだろうか。あの小さな子供が、しかも怪我をしている子供が一人で出歩くのはちよつと考えにくい。もしくは看護師か医者と一緒にのだろうか。そっちの方がどちらかと言えばありがたい。カカシでは気配を殺していても気付かれる可能性がある。

中庭に至る渡り廊下から見た空は、青かった。今日は雨が降っていない。これならば、ナルトも中庭で散歩をする気分になるはずだ。肌寒くはあるが過ごしやすい陽気の今日は、確かに散歩をするには丁度いい。

渡り廊下に入ったところで、気配を殺し、音を立てないように移動した。中庭の出入り口となっている大きな引き戸のガラス窓から、中庭をうかがう。

最初に目に入っただのは見慣れた銀髪だ。やはり居たのかと思ったカカシのその腕の中に、ふわふわと揺れる金髪を見つける。

(……ナルト)

少し前に会った時と違い、ずいぶん明るい表情だ。カカシに心を許している証拠なのか。そう言えば巻かれている包帯の数もずいぶん減って、今目立っているのは吊られている右腕だけだ。回復は順調らしいとそこから悟る。カカシがこちらに提出してくる報告書には、怪我の経過までは書かれていなかった。彼の反感がひしひしと伝わる簡素な報告書だ。

その報告書も、もうすぐ受け取ることになるだろう。

目を細めて二人を見つめていると、カカシの大きな身体の影から、誰かが顔を出した。彼に隠れて今まで見えなかったその人は、赤い長い髪の、女性だ。

「……な」

それは、クシナだった。彼女は、カカシの腕に抱かれたナルトを

静かに見つめている。

クシナがあの子供のことに気づいていたなんて。迂闊だった。

「クシナ……」

思わず彼女の名前が口から漏れ出た。それに耳聡く気付いたらしい力カシが、ぱっとこちらを振り向く。ミナトはクシナから視線を外すことが出来ないまま、中庭にゆっくりと踏み込んだ。

14（後書き）

木の葉の病院に中庭ってありましたっけ？なかったらごめんなさい；

実は、ミナト視点の地の文で恐らく初めて“ナルト”と呼ばせてみました。分かりにくいですが作者的には大きな変化です。

クシナを連れ立って病院を訪れてからしばらく経ったある日、先日頼んでおいたカウンセリングの結果が出たと聞いて、カカシはナルトの主治医を訪ねていた。しかし主治医から告げられた診断結果に、カカシは信じがたい思いを込めて口を開く。

「わからなかった？」

怒りすら込めた口調に、医者はなんとも言えない苦笑を返してきた。

「はあ、すみません……。専門の先生は、少なくとも嘘は付いていないとおっしゃっていたんですが、記憶障害があるかどうかは……」

曰く、ナルトが小さすぎるのがいけないらしい。この歳の子供は妄想と現実の区別がついていないのが普通であるとも言えるし、多少現実と矛盾するようなことを言ったとしてそれがイコール記憶障害であるかどうかは判断しにくい、だそうだ。

役に立たない、と内心悪態をつきつつ、カカシは説明を受けてから早々に主治医の元を去ることにした。話を聞いていた診察室から出る際、主治医の口からナルトが中庭にいると聞いた。もう歩けるようになっていたのかと、驚くと同時にその回復に喜びを感じる。

「足はもともと骨を折っていたわけではなくて捻挫程度だったので、もう歩ける状態なんですよ。クシナ様が一緒にいますから」

主治医の言葉に目を見開く。彼女がナルトと初めて会ってから、もう一週間ほどになるだろうか。あのあと何度か尋ねたと彼女の口から聞いてはいたが、今日も来ているとは思わなかった。

なんとなく早足で中庭に向かうと、確かにそこには二人がいた。折れた腕を吊っているが元気そうなナルトが、庭を飛ぶちようちよを追っていて、それにクシナが付いて行っている。カカシに先に気づいたのはクシナで、ナルトにそれを告げているのが見えた。

まるで本当の親子のように見えたその光景に、カカシは目を細める。

「ナルト」

「あ！カカシにーちゃん！」

呼んでやれば駆けてくるナルトを胸に迎えて抱き上げ、遅れてやってきたクシナに小さく会釈した。

「今日もいらしてたんですね」

「ええ。昼間は暇だから」

クシナに笑い返ししながら、カカシは腕の中の子供に視線を移した。

「カカシにーちゃん、背たけー！」

笑顔全開のナルトは、急に高くなった視界に気分が高揚しているようだ。ケラケラと笑っているその様子を見ながら、カカシはふと考える。

ミナトにこの子供が侵入者かもしれないと告げられたとき、そんな馬鹿な話があるかと自分の中で一蹴した。ナルトは普通の子供ではないと、カカシは自信を持って言い切れたし、彼がそこまで敏感になる理由もわからなかった。しかし、彼がそれを疑う理由は確かにあった。

ミナトの実子と瓜二つな、名を同じくする子供。

果たして自分の判断が正解なのか、カカシはよくわからなくなってきた。

カカシは、ナルトが一体どこから来て、どうしてあそこで倒れていたのかも一度きちんと聞くべきだと考えていた。それをクシナの前で聞くことは憚られたが、カカシがナルトに直接会える機会はそこまで多くない。ナルトの監視を引き受けた身ではあったが、他の任務も無視出来るはずはなく、カカシがいない間は仕方なく他の暗部に監視が任されている。その報告書には最終的にカカシのチェックが入るので、この監視の任務を受けたことに意味が無いことはないだろうが、やはり暗部に任せるのは気分が良いものではない。

いつまでも先延ばしにすべき問題ではないし、今聞いておいた方が得策だ。

「ナルト、ちょっといいか？」

「え、何？カカシにーちゃん」

「うん。お前、何で——」

「……クシナ？」

その声に、カカシは弾かれたように中庭の出入り口を振り向いた。病院の建物から中庭に出るには、二つの棟を繋ぐ渡り廊下を利用する。病院内も基本的に土足であるので、中庭と渡り廊下の出入りは自由だ。カカシがそちらに視線をやると、その渡り廊下に立っている人物が、わずかに眉間にシワを寄せてこちらに近づいて来ているところだった。目を引く金髪が揺れている。

「クシナ、何でここに……」

四代目火影、波風ミナトが、そこにいた。

15（後書き）

短めかつ話が前後していますが、カウンセリングの結果をお話にし込みたかったので。

次回は少々お待ちください。

ナルトが身構えたのが腕の中の子供の動きで分かり、カカシは小さな身体を抱く力を少し強めた。ミナトはナルトを侵入者だと疑ってかかっている人だ。ナルトが警戒し怯えるのもわかる。カカシはナルトを抱えたまま、こちらに歩み寄るミナトを見つめた。

彼は何をしに来たのか。ナルトの様子を見に来たのだろうか、それともカカシが監視の任務に真面目に取り組んでいるかどうか、チエックにでも来たのだろうか。ふと隣のクシナをうかがいみると、ミナトと静かに視線を交わしている。その雰囲気妙に恐ろしく、カカシはつい何歩か後退した。

「クシナ……」

ミナトのそれは静かな声だったが、確かに怒りが込められていた。雰囲気ですれを悟ったのだろう。ナルトがカカシの服を掴む手に力が込められる。カカシは安心させるようにその小さな背中を撫でた。

「カカシ、どういっつもりだ」

矛先がこちらに向いた。その言葉から監視の報告書のことを言っているのだと解釈して、カカシは眉を顰める。クシナとナルトを引き合わせたのは自分で、それはミナトの判断を仰がずに行ったことだ。無論、そのことを報告書には記載しなかった。クシナをナルトに会わせるときに、そのことがミナトにばれた場合にはある程度の処分を覚悟していた。しかし、まさか彼らの子供とナルトが瓜二つで、しかも名前まで一緒だなんてそのときは知らなかった。処分を

受ける程度の覚悟で、彼らを引き合わせるべきではなかったの
と、カカシの中で後悔が首をもたげる。今更ながらに、クシナを
ナルトと会わせたことの意味の大きさを痛感した。

「申し訳ありませんでした」

ナルトを抱いたまま僅かに腰を折るが、ミナトはますます顔を歪
めただけだった。

「……クシナ、ちょっと来い」

何度かカカシたちとクシナを視線で見比べた後、ミナトはそう言
った。クシナの返事を待たずに翻った白い羽織を追うように、クシ
ナは無言でそれに着いて行く。カカシは咄嗟に、歩き出した彼女に
声を掛けた。無言で見送ることはできなかった。

「クシナさん、あの」

「大丈夫」

言いきる前にかぶせるように言われた言葉は、彼女らしい強い光
を放っているようだった。それ以上何も言えなくて、カカシは渡り
廊下へと消えて行く二人を見送る。

だが、ここで立ち尽くしているわけにもいかない。

「ナルト、病室戻るよ」

「……うん」

ミナトが居なくなつてほつとした様子のナルトを抱えたまま、病室へと急いだ。そしてベッドに座らせたナルトに「すぐ戻る」と言いつけて、ミナトとクシナが居るであろう方向を目指す。カカシの鼻は忍犬並みの嗅覚を持っている。よく知った彼らのことならば、すぐに見つけることが出来る。

匂いを辿つた先は、屋上に続く階段だった。音を立てないように無音で階段を登る。階段の踊り場に彼らの姿はなく、微かに話し声が屋上の扉の向こう側から聞こえてきた。二人は屋上にいるようだ。

カカシは、もしもミナトがクシナを一方的に攻めているならば、その責は自分にあると謝罪をするつもりだった。このことであの仲のいい二人に亀裂が入るなんて、そんなことはあつてはならない。とりあえず二人の間に入るタイミングをうかがうため、失礼だとは思つたが盗み聞きの姿勢に入った。こういうとき、忍をやっていると楽だ。

「何で黙つてた」

ミナトの固い声が聞こえた。

「……言つたらどうなつてたの」

「それは」

「あなたはあの子と私を会わせたくなかつたんでしょう？ 私もあなただつたら、たぶんそうしてる」

「……どこまで知ってるんだ」

ミナトの言葉に、クシナを責める様子はない。とりあえず安心して、カカシは二人の会話に耳を傾けた。

「ミナトが、あの子のこと侵入者だって疑っていることは、知っている。ねえ、あの子は、……ナルトは、どうなるの？」

「…処分が決定しそうだ。里の管理下に置くために、拘束する」

それにカカシは思わず目を見開いた。監視の任務を言い渡されているが、そのことについては知らされていない。

「そんな――」

「仕方ないんだ。それに、よく考えてくれ、クシナ。あの子は“ナルト”じゃない」

「わかってるわ！そんなこと……。だけど、あの子はただの子供じゃない！」

「ただの子供かどうかは、こちらが判断することだ」

「ミナトっ！」

僅かな物音が聞こえた。チラリと扉のガラスから彼らを覗き見ると、クシナがミナトに掴みかかっている。

カカシはすっかり踏み込む機会を逸して、二人の様子を静かに見守った。

「あの子供はナルトじゃないだろ、君が肩入れすることはない」

「あの子がナルトかどうかなんて、この際関係ない！お願い、あなたは火影でしょ？何とか出来ないの……？」

「クシナ……。何度でも言うよ、あの子供はナルトじゃない。代わりにしちゃダメだ」

ミナトの口調はまるで幼子を宥めるようなそれだ。それを悟ったのか言われた内容に血が上ったのか、クシナは一層声を荒げた。

「代わりになんて、そんなつもりないわ！……確かに、重ねてないって言ったら嘘になる。だけど、……。あの子に会ったとき、守りたいって、愛したいって思ったのよ。この気持ちは嘘じゃない……」

絞り出すようなクシナの訴えだった。カカシはそれを聞いた瞬間の気持ちを、言葉にすることが出来ない。胸を絞めるような感覚だけが強く残った。

「……ねえ、ミナト、お願い。もし何かあった時の責任は全部私が取る。もしものときは、どんな処分でも受けるから！ねえ、だからお願い。あの子のこと、もう少し考えて」

そこで会話は途切れた。しばらく無言が続いた後、クシナはミナトを掴んでいた手を離し、ミナトはそんな彼女を言葉もなく見下ろしている。

そうして、果たしてどれほどの時間が経っただろうか。唐突に足音が聞こえ、出入り口の扉が開いたことにカカシは不覚にも瞠目した。現れたミナトは、ほんの一瞬カカシを一瞥すると、背後にいるクシナに一言小さく、しかし確かに伝わる響きを持って告げる。

「勝手にしろ」

それだけ言っで、ミナトは階段を下っていく。カカシは咄嗟にその背中を呼びとめた。

「先生！」

足を止めたミナトは、しかしこちらを振り向かない。

「いいんですか？」

投げた疑問はあまりに曖昧だった。それでも伝わったからこそ、余計な言葉は削った。

ミナトは逡巡しているようにしばらく無言でいると、やはり振り向かずにカカシに命令する。

「……監視を続ける。手は抜くな」

暗に情に流されるなど、そう言いたいらしい。だが、情に流されてしまっているのは貴方だろう、と突っ込みたい。

しかしそう思いながらも、カカシはひどく安心していた。あの命令は、つまりこれ以降も監視続けるということだ。それは、ナルトを拘束する話が出る可能性を示唆した言葉だろう。

カカシは命令の言葉を残して去っていた火影を追うことはせず、屋上に残っているクシナの方へ足を向けた。彼女は屋上の真ん中に座りこんでいる。

「クシナさん……」

名前を呼んだ後、何と声をかければいいのか、迷う。座りこんだ彼女は呆けたように空を見上げていた。ぼんやり開かれたその口がやがて、薄く笑みを作る。眉間にしわを寄せたその笑顔は、まるで何かを堪えているように見えた。

「また、甘えちゃったんだなあ……」

また、とはどういうことなのか。クシナの笑みの意味がわからず、カカシは結局、彼女が立ち上がるまでクシナに話しかけることはできなかった。

16（後書き）

遅くなって申し訳ありませんでした。

のちに改訂の可能性あります。

カカシが帰ってこない。

ナルトは、カカシが消えて行った廊下の方向を睨みつけていた。カカシがナルトに病室にいるようにと言われてからどれだけ経ったのか、時計を読むことが出来ないナルトに正確な所は分からない。だが、これはずいぶん長いのではないだろうか。一人が慣れているナルトだったが、こらえ性がないのは性分であるし、もともと子供であるので我慢は苦手だ。

つまり、ナルトは退屈している。いつまで病室こほに居ればいいのだろうか。暇ならば昼寝をしようとも考えたが、クシナが来る前までぐっすり寝ていたので、ベッドに横になってもさっぱり眠気は襲ってこなかった。絵を描こうかとも思ったが、あまり乗り気がしない。それならばカカシと遊ぶのが一番だと結論付けたわけだが、そのカカシはいつまで待っても帰ってこない。

（早く帰って来いってばよ！）

暇で仕方がないナルトは、そんな念を飛ばしながら廊下を睨みつけていた。カカシが来るのを見つけたら、隠れて脅かしてやるつもりだった。銀髪の彼の驚いた顔は、想像するだけで愉快だ。怒らねえ。たって知るものか。待たせているカカシが悪いのだ。

「ねえ」

そのとき背後から突然掛けられた声に、ナルトは飛び上った。もしかしてカカシに回りこまれたのだろうか。瞬間的にそう予想した

が、振り返った先に居たのはカカシではない。金髪に青い目をした大人が、屈みこんでこちらを見ていた。

「うわっ！」

そのことにさらに驚いて、ナルトは病室に逃げ込む。ベッドを囲むカーテンに身をくるむように、咄嗟に身を隠した。

あの大人のことは覚えている。確か、四代目火影だと名乗っていた。写真で知った四代目火影は好きだったが、彼はナルトを嫌う大人の一人だった。だったら、警戒を解くわけにはいかない。

「そんなことしなくたって、取って食ったりしないよ」

大人はカーテンを捲り上げて、あっさりとナルトを見つけてしまった。ナルトはどうしていいか分からず、きよきよと視線をさまよわせる。やっぱりこの人は苦手だ。第一印象があんまりよくなかった所為に他ならない。

逃げ出したいが、生憎とナルトが咄嗟の隠れ場所を選んだ場所は壁際だった。大人に立ちふさがられては、小さなナルトには太刀打ちできない。

（どうしようってば…）

そうこうしている間に、大人の手がこちらに伸びてきた。

（殴られる！？）

思わずきゅっと目を閉じて身構えたが、いつまでも殴られる気配

はない。何があつたのかと恐る恐る目を開けると、金髪の大人は、ナルトに手を伸ばした姿勢のまま、そこにいる。

彼の眉間に皺が寄っている。ナルトにはそれが不機嫌の象徴だと思っていた。なのに、この人から嫌な雰囲気は感じられない。

彼は、二度と動かないんじゃないかと思うくらい長い時間その格好のままだった。そのうちその手は何かを握りこむように拳の形を作つて、彼の体の横に戻っていく。心なしか、その拳が震えているように見えた。

もしかして殴るのをがんばつて我慢しているのだろうか。そう思うと、ナルトの中で子の大人の評価が少しだけ上がる。今まで会ってきた大人たちは、自分を嫌い、何のためらいもなく暴力を振るってきたような人がほとんどだった。それを我慢するだけで、その人はナルトの中で、ほんの少しだけだが“いい人”に分類された。――子供の感覚はひどく一般からずれていた。

「……ねえ、君は、どこから来た？」

大人の言葉に、ナルトは首を傾げた。どこから、というのはどういう意味だろう。どこからこの病院に着たのか、という意味ならばそれはもうナルトにもわからない。自分が倒れた場所などとうに忘れてしまっている。あとは、ナルトという存在がどこから来た、ということだろうか。それならばナルトにも答えられる。

「母ちゃんのお腹の中からだと思つてばよ」

その母がどこ誰か、ナルトは知らなかったが。

「……そうだよ。ん」

それきり、彼は黙り込んだ。

「なあ、どうしたの？」

堪りかけてそう話しかけるが、彼から反応はない。なんなんだ。

金髪の大人と対峙することにだんだんと飽きてきたナルトは、早く立ち去って欲しかった。

「……ナルト」

「なに？」

さよならの挨拶をしてくれるのか。彼の呼びかけに応えながら、ナルトは期待していた。彼はまたしばらく口を引き結んだあと、こちらに手を伸ばしてくる。

何となく、今度は殴られると思えるような恐怖を感じなくて、その所作を目で追った。伸びてきた手はナルトの頭に乗る。温かい、大きな手だった。その手が、ナルトの金髪をかき混ぜるように動く。それは、カカシに撫でられたことを思い出された。

やがて離れた手は、そのままどんどん離れて行った。別れの挨拶もなしに、金髪の大人の背中では病室から消えて行く。

結局何だったんだろう。よくわからなかった。確かめるように頭を触ると、彼の体温がまだ残っているように感じた。

16・5 閑話（後書き）

閑話ですので本編には特に関係ありません。

更新遅れて申し訳ありませんでした。この先も少々更新頻度はまちまちになるかと思っています。詳しくは活動報告にて。

三代目火影、猿飛ヒルゼンは啞えた煙管から深く煙を吸い込み、きつい煙を肺から吐き出した。吐き出した紫煙の向こう側で苦い顔をしている男の顔を見て、さらに肺を空にするように息を絞り出す。あちらまで届いたらしい煙の匂いに彼が眉を顰めたのが見えたが、気にする用件ではない。

「あの童か」
わっほ

「ええ」

ヒルゼンが確認のために言ったそれに、男、四代目火影である波風ミナトは短く答えた。その手には一枚の書類。“あの子供”についての報告書だという。里への侵入者ではないかと疑われている子供だ。

ナルトと名乗った子供は、金髪碧眼と特徴的な頬の痣を持っていた。それは、四年前死んだはずの波風夫妻の子供と同じ名前、同じ特徴だ。ミナトがその子供と会った直後の反応を考えても、相当の衝撃を受けるほどにかの子供は彼らの息子と似ていたことが想像出来た。

その子供の処遇についての討議が行われたのは、つい先日のことだ。相談役の長老や暗部のダンゾウは厳しい処分を提案してきたが、ヒルゼンはどうしてもそれを受け入れ難かった。侵入者と疑われているが、なまじ状況証拠しか揃っていないし、子供にしても子供過ぎる。会議の話題が子供を拘束する方向へ進む中、ヒルゼンのもっ

と冷静な判断を仰ぐように訴えた。あの子供が里に侵入したところで何が出来るのか、そもそも本当に侵入者なのかも疑わしい、と。

結界班が出したチャクラの乱れが間違いという可能性も、決してゼロではない。過去にそういった事例は幾つも存在している。

そんな風に、理由は幾らでも作ることが出来る。ただ、ヒルゼンはその子供を犯罪者にしたくなかった。ミナトの様子を見ると、そのような処分をすることは時期尚早に思えるのだ。

ミナトは、ナルトと会った直後から明らかに様子がおかしい。日々の仕事は普段通りに行っているようだが、時折ぼんやりとしているのを、たまにしか会わないヒルゼンですら見咎めた。ナルトによって心が乱されているのは明らかだ。その理由も、確信はなくとも想像はできた。

ミナトは、本心ではあの子供を処分などしたくないはずだ。会議の最中ほとんど発言をしない彼の表情からそれを察し、子供の拘束を考え直すように訴えたが、結局はそれも無駄に終わった。火影の座を退いた己の発言力など、そんなものなのだ。

しかし、最終決定が下されるその日に、四代目火影のその口から宣言された。

「あの子供は里の管理下に置くが、拘束はしないと。」

ミナトを動かす何かがあったのかと邪推したが、それを知りたいとは思わなかった。ミナトが自ら出した決断だ。火影の判断に間違いはないと信じるのが、里に住む忍としての義務だろう。

そして今日。太陽がまだ登りきらない時間帯に、ヒルゼンはミナトに呼び出された。彼の手握られている書類からあの子供についての話題だとは思ったが、彼の苦々しい顔から何の用件なのか想像が出来ない。

たつぷり間をおいてから立ち上がったミナトは、僅かにヒルゼンとの距離を詰めると、ようやくその重い口を開いた。

「あの子供が、もうすぐ退院するんです」

「それは、いいことだな」

あの子供が見つかり、里の病院で療養を始めてからもう一カ月近い。確かにそろそろ退院してもいい頃だろう。

「ただの子供なら孤児院に入れる所なんです、事情が事情なので……退院後の住居が決まっていんです」

「なるほどのお」

何となくだが、呼びだされた用件が読めてきた。

「それでお頼みしたいんですが、三代目様と奥方様に、あの子供の住居を提供してはいただけませんか？」

そこで世話をしろ、とまでは言わないあたり、ミナトの火影としての葛藤が見え隠れする。ヒルゼンは煙管の吸い口を歯で噛みながら、ただでさえ皺が寄った顔をさらに皺だらけにするように眉を顰めた。

「それは構わないが……」

お前が不満そうだ、とは言えなかった。見上げた彼は未だ何かを迷っているように見える。さすがにその迷いが何なのかはヒルゼンには測りかねるが、そんな顔をされては素直に了承出来ない。

「少し考えさせてくれ」

結局そんな無難な答えが口から滑り出た。

“百聞は一見にしかず”。

そんな諺があるが、まさにその通りだと視線の先にいる金髪の子供を見てつくづく思う。金髪の子供は、ミナトの妻であるクシナに抱かれてぐっすり眠っている。四歳だと考えても幼すぎる顔が、寝顔になるとさらに幼く見えた。報告でよく似ているとは聞いていたが、まさかここまで似ているとは。ミナトが動揺するのも無理はない。

ナルトが入院している病室を訪れたヒルゼンは、そこでクシナに抱かれて寝ているナルトを見つけて様々な意味で驚いた。あまりにもナルトが四年前に死んでいった“ナルト”と酷似していることもそうだが、クシナがその子を抱いていることが一番衝撃的だ。クシナがナルトと関わっているとは思わなかった。ミナトがそれを許す

とは、思えなかったのだ。

「クシナや、お前ここで何をしておる」

こちらに背を向けて座っていたクシナは、ヒルゼンの声にぱつとこちらに振り返った。しばらく見ていなかったが、前に会った時より血色が良く見える彼女は、ヒルゼンへにこりと微笑む。

「三代目様、お久しぶりです」

立ち上がり小声で返された言葉は、ナルトを気遣っているからだろう。子供の背中を優しく撫でるその姿は、その子供の母だと言われても何の違和感もない。

「この子を寝かしつけていたんですよ」

さも当たり前のように告げる。どういう経緯でナルトと会ったかは知らないが、どうやら彼女にとって、もうこの子供は庇護する対象であるらしい。愛おしげに頬をすりよせる彼女の表情が、ここ数年見ていないものに見えてヒルゼンは安堵を覚える。

（こんな顔が出来るようになったか）

彼女は自分の子供を失ってから、表面上は明るく振舞っていたが多少なりとも無理をしていると感じていた。ミナトという心の支えがあっても、愛おしい我が子を失った喪失感は果たしてなかなか癒えることがなかったのだろう。笑っている影で今にも壊れそうな心を、ぎりぎりのラインで保っていた。そんな彼女が、幸せそうに頬を緩ませている。

突然現れたナルトという子供は、彼女にとっては救世主だったの
だろう。こんな風にクシナが笑うことが出来たのならば、それだけ
でナルトという子供には感謝すべきだ。

「その子が、ナルトか」

確認のために聞くと、クシナは頷いた。

「そっくりですよ。私も最初は驚きました」

それは彼女にとっては大した問題ではないのか、笑って語られた。
ミナトはそれにずいぶん悩まされているというのに、この差はどこ
から来るのか。

「三代目様は、どうしてここに？」

「ああ。ミナトに、退院後のこの子の世話をしてほしいと頼まれて
な。顔を見に来た」

それを言えば、クシナは僅かに顔を曇らせた。

「そうですか……」

クシナからすれば、愛おしい我が子と同等にも考えている子供を
取り上げられるのだ。里に罪人として拘束されるという事態を免れ
ただけ大分マシだが、結果として彼女の手から離れていくことには
変わりない。

「嫌か？」

「……いいえ。私にこれ以上我を通せる資格はないので」

「どういうことだ？」

クシナは一時ためらう様子を見せた後、静かにヒルゼンを見上げた。

「私が頼んだんです。ナルトを、罪人にしないでほしいと」

？

17（後書き）

三代目登場です。

ナルトを拘束するという意見を急に降ろしたミナトの背景には、クシナの進言があつたのか。驚きはしたが、意外には思わなかった。あの男が意思を変えることは稀なことだ。そのきっかけとなったのが彼女ならば、納得できる。

ヒルゼンはベッドサイドに放られていた椅子のひとつに座り、ゆっくりと彼女の隣に腰を据えた。ふと横を見ると、クシナの腕の中で安心しきった様子で眠るナルトがいる。ナルトはヒルゼンたちが会話をしている中でも起きる気配はない。

ヒルゼンはナルトから視線を逸らし、窓の外を見つめながら口を開いた。

「なるほどのお」

「……あの、三代目様」

「なんじゃ？」

クシナは優しくナルトの背中を撫でる手はそのままに、こちらを見ずに言う。その瞳には確かな決意が込められているように思えた。横目にもその薄緑色の瞳に宿る炎に気付き、ヒルゼンは胸に確かな思いが溢れてくるのを感じた。

「私からも、ナルトのことお願いしてもよろしいでしょうか？」

そう言いながらも、子供の背中をぎゅっと抱きよせる彼女からは、「離したくない」という気持ちが伝わってくるようだ。だからこそ、そう言った彼女の気持ちは尊重すべきで、その言葉を否定することはできない。だが、確認せずにはいられなかった。自分の中で溢れ出た思いに、結論をつけるためにも。

「それでいいのか？」

「はい」

すぐさま返された返事に強い意志を感じることが出来て、ヒルゼンは深く頷いた。未だ眠りの世界をさまよっているナルトの金色の髪を優しく撫で、ゆっくりと立ち上がる。

「お帰りになるので？ナルトとは話して行きませんか？」

「ああ。少し急ぎの用もあるのではな」

「急ぎの用、ですか？」

訝しげなクシナの問いに僅かに微笑んで答えて、ヒルゼンは彼女と子供に背中を向けた。急ぎの用が出来たのは本当だ。これから、四代目火影の元に向かわなくてはいけなくなった。

ミナトは、カカシの報告書により寄せられたナルトが近々退院するという報せを、火影室のデスクに腰を据えて改めて見返していた。資料に書かれた墨字を何度か目で追い、この先の処遇の判断を仰ぐ文面にため息を吐く。

里にとって要注意人物であるあの子供は、現状として孤児だ。ただの子供ならば孤児院に入れるのが妥当だろうが、疑いが晴れていない以上、その処置は孤児院の子供たちを危険にさらすことと同義だ。何より、監視が付いている人間をあのように人が多い所に四六時中置いておくのは効率性に掛ける。

だからと言ってカカシとともに生活させるのは、さらに難しいだろう。あれは毎日里にいるわけではない。四歳の子供の保護者としては不十分だ。だからこそ三代目火影であつた猿飛ヒルゼンに、あの子供の世話を頼んだのだ。

彼にはいきなりナルトの処遇を変えたことについて、ダンゾウや長老たち上層部を説得するのかなり尽力してもらったので、これ以上あの子供について負担を掛けるのは忍びなかった。だが、それでも複雑な事情があるナルトは、信頼できるヒルゼンに任せるのが一番だと思ったのだ。

すぐに快諾はしてくれなかったが、あの方ならばきっと引き受けてくれると信じていた。だというのに、急に火影室に現れたヒルゼンは、口に不敵な笑みを浮かべてミナトに「否」を突き付けてくれる。

「三代目様、もう少し考えてもらえませんか」

「もう十分考えた結果じゃ。ワシの考えは変わらん」

煙管の煙の向こう側、そう言うヒルゼンはなにが楽しいのか口端を上げている。細められた目はギラリと光っていた。長年忍大国最強の木の葉隠れを引っ張ってきた御仁の鋭い眼光は、年かさを重ねて皺が増えても変わらない。

この目をしたヒルゼンには、彼に比べてまだまだ若輩であるミナトは絶対に敵わないのは経験則から分かっていた。だが、どうしてもこれについては譲れないところがあった。彼に面倒を見てもらうのが一番だと、今里をまとめているミナトが考え決めたのだ。何としても首を縦に振ってもらわなければ困る。

「お前の家で養えばいいだろう。若夫婦二人に、あの家は広いじゃろって」

苦悩するミナトを余所に、ヒルゼンは呑気に煙管を揺らしながら言う。

「あのですね、三代目様……」

言いかけて、ミナトはその言葉を飲みこんで手のひらで顔を覆った。どんな言葉を掛けても彼の考えがそう簡単に変わるとは思えない。彼にイエスと言わせるには、一体どうすればいいのだろうと考えるが、里いちばんのキレ者である自分の頭にいい案は浮かんでこなかった。

そうして頭を抱えていると、火影室の扉が唐突にノックされた。唐突だと感じたのはミナトの主観である。それほど周りに気を配れていなかったのだ。

悩みの種を増やしてくれたヒルゼンは、その気配から誰が来たのか悟ったらしく勝手に「入れ」と許可を出している。

「失礼します」

入ってきたのは案の定、カカシだった。手に封筒を持っているところを見ると、新たな報告書を持ってきたのだろう。ヒルゼンが居ることに多少不思議そうな顔をしたが、カカシはいつも通り、型どおりにこちらに書類を渡してくる。受け取ったそれはデスクに置いた。今はすぐに目を通す気になれない。

それを見ていたヒルゼンは、いいことを思いついたとでもいうかのように手を打った。

「そら、カカシを頼ってみたらどうじゃ？」

「——三代目様、それはですねえ……っ」

火影の会話にいきなり自分の名前が挙がって、カカシはさらに不審げに眉を潜めた。

「カカシはナルトに相当目を掛けているそうじゃないか」

「え、ナルト？ナルトがどうかしたんですか？」

ナルトの名前にカカシは耳聴く反応して、里の上層部同士の会話

に参加してきた。それまで会話の内容には反応しつつも邪魔をしないように我関せずとしていた彼だったが、ナルトの名前は無視できないらしい。

「ナルトの退院後の住居についてだ。カカシ、お前ナルトを預かる気はないか」

ヒルゼンは親切にもカカシの問いに応えていた。

「……そうさせていただけのならば、俺は願ったり叶ったりなんです」

一瞬目を見開いた後目を伏せたカカシは、判断を仰ぐためか視線をこちらに向けてくる。ミナトは否定の言葉を述べるために、その視線から目を逸らした。

「駄目です。カカシは多くの任務を抱えていますし、独り身です。まだあの子供は小さいのですから、キチンとした保護が必要なんです。カカシでは不十分です」

それを言うと、カカシは俯いて考え込んでしまふ。自分が子供の保護に向かない人間であることは自覚しているのだろう。

カカシはこの里の中でもずば抜けて優秀な忍だ。代わりになる人材は今のところいない。それを思うとカカシは強く出られないのだ。彼は自分が里の駒のひとつであることを分かっているんだろう。

しかし、それをあざ笑うかのようにヒルゼンは鼻を鳴らす。

「カカシが任務で出掛けている間は、クシナに任せればいいだろう。」

ナルトはずいぶん懐いているようだったが？」

今度は力カシが手を打った。

「ああ、なるほど。それは名案で」

「ちょっと!!」

進みそうになった話を、ミナトは手を上げて必死の思いで静止した。二人には胡乱気な視線を向けられる。そんな風に見られるいわれはないはずだが。

「俺は反対です。……正直、今クシナが病院に通っていることだつて賛成はしていないんですよ」

「まあ、固いこと言うな」

「そう言う問題ではありません」

ミナトが食い下がると、ヒルゼンは呆れかえったようにため息をついた。ため息をつきたいのはこっちだ。いくら先代の火影とは言え、先代は先代だ。里に関することを現代の火影の意向を無視してまで決める権限などない。無理難題をあつさりと片付けるなど、彼が猿飛ヒルゼンでなければ言ってしまうところである。

眉をひそめるミナトを余所に、ヒルゼンは煙管を一口含むと、紫煙を吐き出しながら言った。

「火影としての大義名分が欲しいならば、ナルトの監視役をしている力カシに預けた方が、効率がいいと考えたらどうじゃ？クシナの

ことならば、新たな監視役として任務を言い渡せばいい。あれも今は前戦に出ていないとはいえ、一端の忍だ」

「それは……」

「お前だつて、あの童を邪険にしたいわけじゃないだろうて」

それを言われてしまえば、否定しきれない。

「とにかく、何を言われてもワシの考えは変わらん。あの童わうについて、ワシを頼ることはやめるんじゃない」

「三代目様!？」

この話は終わりとばかりに火影室の扉へ向かうヒルゼンの背中をミナトは呼び止めたが、彼は止まることなく、年齢を重ねても一流の忍であることがわかる所作で部屋から辞していった。残されたミナトとカカシは、思わず互いに目を見合わせる。そしてミナトは大きくため息をつき、カカシは苦笑して肩を竦めた。

椅子に深く座り直して、ミナトは考えた。ヒルゼンがあの子供を保護してくれないとなると、選択肢は大幅に少なくなる。ダンゾウや長老方は、あの子供に対してかなり風あたりが強い扱いをしそうだ。それはミナトの望むところではない。

しかし、だからと言ってなにも事情を知らない忍夫婦の所に里子のように預けるのも躊躇われる。一時は里で拘束し、罪人として扱うことが決まりそうになっていた子供だ。事情を話したらダンゾウや長老方と同じ結果になるだろう。それを思うからこそ、ヒルゼン是最適任者だったのだが――

ヒルゼンにこの話を拒否された時点で、答えは一つしか残っていないことに、ミナトはそこで気付いた。

「……カカシくん」

「はい、火影様」

話しかけられるのを待っていた、とでも言いたげな声のトーンに、ミナトはまた大きくため息を吐きたくなった。それを何とか呑み込んで、一つ指示を出す。

「あの子供はお前が預かれ。それで……お前が居ないときは、クシナに任せることにする」

「はい！」

笑顔で答える彼を見て、こんなに嬉しそうに笑うカカシを見るのも久しぶりだな、とどうでもいいことを思った。

18（後書き）

長らく更新を休んでしまい申し訳ありませんでした。これから少しずつ更新頻度を上げていきたいなあと思っていますので、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0123v/>

幸せになれるかもしれない世界で

2011年10月14日02時02分発行